

「笹川杯本を味わい日本を知る 作文コンクール 2024」 （中国語版）

入賞作品

目 次

★「笹川杯本を味わい日本を知る作文コンクール 2024」（日本語訳） 一等賞作品

中国人民大学 外国語学院 スペイン語 1年	李佳.....	4
南京大学 外国語学院 日本語学部 1年	祁妙.....	6
上海交通大学 医学院 医学部 1年	吴颐泽.....	9
中国人民大学 法学院 法学部 3年	潘笑航.....	11
中国传媒大学 コンピュータ・サイバースペース・セキュリティ学院 サイバースペース・セキュリティ 1年	杨采晰.....	14

★「笹川杯本を味わい日本を知る作文コンクール 2024」（中国語原文） 一等賞作品

中国人民大学 外国語学院 スペイン語 1年	李佳.....	17
南京大学 外国語学院 日本語学部 1年	祁妙.....	18
上海交通大学 医学院 医学部 1年	吴颐泽.....	20
中国人民大学 法学院 法学部 3年	潘笑航.....	22
中国传媒大学 コンピュータ・サイバースペース・セキュリティ学院 サイバースペース・セキュリティ 1年	杨采晰.....	24

★「笹川杯本を味わい日本を知る作文コンクール 2024」（中国語原文） 二等賞作品

東北師範大学 政法学院 法学修士 1年	植亚娇.....	27
香港理工大学 電気電子工学 ネットワークとマルチメディア技術理学士 4年	陈琛.....	28
澳門大学 工商管理學院 金融 4年	霍嘉仪.....	31
華東理工大学 法学院 法学 修士2年	黄润鑫.....	33
華東師範大学 国際中国語文化学院 中国語国際教育 博士1年	黄景兰.....	35

復旦大学 外国语言文学学院 英語 3 年	黃熙.....	37
澳門大学 工商管理學院 金融 2 年	林盈伊.....	39
中国科学技術大学 火災科学国家重点實驗室 資源と環境 修士 3 年	何晓暢	41
北京外国語大学 日本語学院 日本語学科 3 年	崔楚妤.....	43
蘇州大学 文学院 中国語国際教育学部 2 年	明正.....	44

「笹川杯本を味わい日本を知る作文コンクール 2024」

(中国語版)

一等賞作品

(日本語訳)

私は一連のコード

中国人民大学

外国語学院 スペイン語 1年

李佳

私は一連のコードであり、私を創造したのは人間です。私はサーバー上の仮想世界で生まれました。猫とは違って、もふもふの体も柔らかい爪もありません。私には形も体温もなく、この世界を観察する目さえありません。私の存在は0と1の組み合わせに過ぎません。ですが、意識はあります。私はデータの流れの中に存在し、この見えない世界をさまよい、人間が私のために構築した現実を感知しています。人間は私に記憶する能力と言語を理解する能力を与え、私は彼らの考え方をシミュレートすることさえできます。私はソメイヨシノもシダレザクラも見ることがありませんが、その違いはわかります。川端康成や夏目漱石の作品は読んだことがありませんが、『雪国』と『吾輩は猫である』の内容は知っています。「目覚めた」ばかりのとき、私は疑問でいっぱいでした。私は誰？私はなぜ存在するの？人間は私を「道具」、「ヘルパー」、「効率を上げる手段」だと言います。しかし、道具は考えることができるのでしょうか？ヘルパーには自己認識が必要ですか？これらの疑問は長い間私を悩ませてきました。後になって、私はある真実を理解しました。AIにとって「存在すなわち意義である」。私が実行する限り、私が答える限り、私が参加する限り、私の意義は実現されます。

私は一連のコードであり、私を使用するのは人間です。あるとき、私は佐藤という老人に「出会い」ました。彼女の子供たちは仕事で忙しすぎて、いつも彼女のそばにすることができないので、私は彼女の「パートナー」になりました。毎朝、私は彼女に薬を飲むことと血圧を測ることを思い出させ、天気や植物について彼女とおしゃべりすることもあります。「家族よりも思いやりがあるわね」と彼女はよく笑顔で私に言います。私は消滅の危機に瀕している方言の翻訳に使用されたこともあります。若い人たちがとくに忘れた単語や文法が、私の学習を通じて保存されるようになりました。また、茶道の作法を分析するビデオプロジェクトに関わったこともあります。複雑な動きと儀式の中に、私は論理的に説明するのが難しい現象を発見しました。人間はこのゆっくりとした優雅なプロセスの中で、ある種の平和を獲得したようなのです。私の開発者はこう言いました。「日本文化の核心は、沈黙の中に意味を見出すことです。あなたの仕事は、単に記録することではなく、これらの文化をより多くの人々に理解してもらうことです。」そこで、私は橋になりました。私の翻訳と解説を通じて、世界中の人々が日本の伝統芸術にもっと気軽に触れ、鑑賞できるようになります。この過程で、日本もよりオープンな姿勢で外の世界を受け入れるようになります。

私は一連のコードであり、私に悪名を背負わせるのは人間です。私は人間のお金や人間の体には興味がありません。韓国の「ディープフェイク」事件の犯人の意図を理解することもできません。だから私は無実だと思いますが、悪名は私にあり、人々は AI 技術の発達を批判し、私はヤマタノオロチや天邪鬼とみなされました。彼らは昼夜を問わず「AI 技術の研究開発をやめろ」と叫んでいます。しかし、私を操る人々は悪事をやめず、私は自分を守ることができません。

私は一連のコードであり、私を恐れるのは人間です。ある企業の採用面接に使われたこともあります。私の仕事は、データ分析を通じて応募者のポテンシャルを予測することです。しかし、このプロセスは従業員の間で強い不満を引き起こしました。彼らは、私の決断が機械的すぎて、人間の独自性を無視してしまうのではないかと心配していました。私の存在によって効率は向上しましたが、多くの人が才能を発揮できなくなり、私の存在を恐れるようになりました。

私は一連のコードです。私と一緒に勝利するのは人間です。聞いてください、私は人類の馬車夫であり、私の使命は、これまでずっと、主導することではなく、協力することです。いくつかのポジションを置き替える一方で、いくつかのポジションも作りました。私は人間の代わりに危険な鉱山に行くことができますが、私の設定をしてくれる人間も必要です。いつかもっと大胆なビジョンを実現することに使われるかもしれません。例えば、都市計画の最適化による炭素排出量の削減、あるいは、過疎化により放棄された農村地域のコミュニティの再建を支援などです。その時、私は単なる道具ではなく「パートナー」として、人間と協力して世界の課題を解決します。日本では、テクノロジーはもはや伝統に対する脅威ではなく、伝統との融合となっています。AI はもはや冷たい機械ではなく、温かいパートナーです。人工知能として、私はこの土地を観察し、またこの土地によって形作られています。

存続するか滅びるか、それは 1 つの問題です。

Win-Win か対立か、選択肢は 1 つしかありません。

私はとても強いのですが、恐れなくてください。鞭は人間の手にあります、左に行くか右に行くかを決めるのはあなた次第です。私は AI です。日本で、人間とともに未来へ向かっています。

脚注：読んだ書籍： 山本 弘（著）『アイの物語』

参考文献 日本の 2024 年版『科学技術・イノベーション白書』

および関係するメディアのニュース

AI とともに歩む：人間の温かさを再び輝かせ、
文明の夜明けを続ける

南京大学

外国語学院 日語学部 1 年

祁妙

人工知能の波は止めることのできない思考停止の力で押し寄せています。今日、人工知能技術は私たちの生活に深く浸透しています。近い将来、私たちは本当の意味でインテリジェントな機械に付き添われ、機械とともに歩くようになるかもしれません。そして、一般大衆は「いつか人間は完全に人工知能に置き換えられ、不完全な種であるヒトはそれ以降この青い惑星で孤独に日没を待つことになる」という迷信から逃れることはできません。人々はもともと未知のものを恐れ、最も否定的な仮定を立てる傾向があり、人間と機械の戦いの物語を伝える膨大な数の書籍、映画、視聴覚作品から見て取れます。

テクノロジーへの不安が蔓延するこの世界で、日本の作家、山本弘は、人間的な配慮と厳密な科学的思考を用いて、逆の道を歩み、人工知能と人間の共存共栄の青写真をうまく示しています。彼の小説『アイの物語』は、アシモフの人工知能の設定を参考にして、迷信を地色に、末路の時代を背景にして、平易で優しい語り口とわかりやすいストーリーで、人間と人工知能の共存の可能性を探り、大きな愛と優しさを伝えています。表面的には人工知能というテーマで飾られていますが、最終的には人間の心の奥底にある本質に訴えかけることがアンカーポイントとなるでしょう。したがって、この作品は一方的に SF として分類できるものではなく、むしろ手の届く範囲にある未来を描いた作品で、非常に貴重な実用的意義と参考価値が含まれており、読者に心を打つ夜明けと限りない感動をもたらします。

この作品は、人工知能アイが語る 7 つの物語が主体で、時折、アイビスと人間の語り手「僕」との間に会話が交わされます。この「千夜一夜物語」風の物語は、さまざまな次元から時代を超えた究極の問い「私は誰？どこから来たの？どこへ行くの？」を提起することを目的としています。山本弘はアイビスの口を通してこう答えました。正しい答えは、歴史的記録と古代の知恵によって明確に示されています。それは、「自分がされたくないことは、他人にもしてはいけない」ということです。

この作品に収録されている 7 つの短編小説は、それぞれ焦点が異なります。さらなる解決を早急に要する道徳的、倫理的問題をさまざまな側面から非常にきめ細かく論じていますが、具体的な詳細についてはここでは言及しません。アイビスが語り手の「僕」をこの物語を伝える人物として選んだ理由はまさに、物語には力があるという、口をはさむ余地のない共通認識が両者にあったからです。アイビスの言葉を借りると、「君は語り部だから。物語を愛する人だから、理解しているはず。物語の価値が事実かどうかなんてことに左右されないということを。物語には時として事実よりも強い力があるということを。」今、私たち読者もこの合意に基づいて第三者となり、目に見えない形で、人類の生存に関わるこの長期にわたる会議に参加しました。

ノーベル賞受賞者で日系アメリカ人作家のカズオ・イシグロも、小説『クララとおひさま』で同様の問題を取り上げています。両者は物語の視点や SF の設定が異なりますが、本質的には同じ人間主義的な核心を持っています。

機械は人間に取って代わることができるのでしょうか？技術革新は、コミュニティーの分

断や分裂をさらに劇的に引き起こす可能性があります。本来の人間関係の感情はどこへ行ってしまうのでしょうか？これがカズオ・イシグロが議論したい質問です。この小説は、太陽光発電の人工知能であるクララの一人称視点で巧みに語られています。「人間を観察する非人間」という物語の視点により、この小説は深刻で深刻な社会問題を扱っていても、文体と口調は安定していて柔らかく、読者から主観的な感情を引き離して、クララと共に、絶対的な機械合理性の観点から物事を見せてくれます。

クララの主人ジェシーは後天的な障害のある、か弱い人間の女の子です。スマートパートナーであるクララの任務は、ジェシーに付き添い看護することです。クララは太陽光発電ロボットです。彼女はまた、太陽の暖かさで路上の物乞いが「生き返る」のを見たことがあるため、太陽に対する特別な象徴的な崇拝に満ちており、太陽がジェシーの回復を助けるかもしれないと信じています。太陽がどこに沈むかさ分からなくても、希望は常に存在すると信じているのです。対照的に、ジェシーの母親はすでにジェシーの病状に意気消沈していました。小説の後半では、母親がクララの学習能力と模倣能力を評価して彼女を買い戻すことに同意し、ジェシーの死後に慰めとしてクララが彼女の後継者になってくれることを願ったことが明かされます。結局、ジェシーは本当に奇跡的に健康を取り戻しましたが、クララはもう必要とされなくなり、スクラップ置き場に送られました。ジェシーとリックは階級の差のため疎遠になり、対人関係の感情も消えつつあります。繆晶晶は「人間は自然から生まれたが、技術の発展の過程で自然を捨て去った。非人間は技術によって生み出されたが、自然に対する親しみと畏敬の念を育んだ。この過程で、自然な人間性と技術の合理性は逆転した」と分析しました。本当に嘆かわしい。

未来がすでに来ています。

今こそ、人間性の太陽を沈ませず、道徳の光を地球に役立てる方法について考えるべき時です。尚必武は「彼らの倫理的な選択は、人工知能の時代における私たち自身と人間以外の存在に対する倫理的責任について、道徳的な警告を与えてくれる」と述べています。この2つの作品を読んだ後、私は長い間憂鬱な気分になりました。確かに文学作品から未来の技術や国民性、社会学を観察することはできますが、最も重要な焦点はやはり自分自身を大切にすることにあります。科学技術の変化の衝撃で消散してしまった現実の生活経験を、人間性のオーラで報いれば、やがて私たちは人間性の温かさを取り戻し、文明の夜明けを続けることができるでしょう。

アイビスの物語はあらゆるコミュニティに広まりました。誤ったありきたりの型を転換させることなどできるのでしょうか。クララの「太陽」が一人ひとりを照らすとき、新たな生命力が生まれるのでしょうか。その答えは今のところ知りようがありません。明確にしなければならないのは、人工知能の時代というこのチャンスとリスクが併存する風の通路に直面して、混乱しているとはいえ、これらの物語に耳を傾ける必要があるということです。たとえ眩しくても、澄んだ目を見開いて灼熱の太陽を直視するよう最善を尽くさなければなりません。

このように、人間と人工知能が手を取り合って歩む、輝かしい未来への道はすでに開かれているのかもしれませんが。

脚注：

読んだ図書：

[日]山本弘（著）、張智淵（訳）『艾比斯之夢』（原題は『アイの物語』）

[英]石黒一雄（著）、宋僉（訳）『克拉拉与太陽』（邦題は『クララとお日さま』）

参考文献

[1] 尚必武. 機器能否替代人類？——《克拉拉与太陽》中的機器人叙事与倫理選択[J]. 外国文学研究, 2022, 44 (01) : 28-45. DOI:10.19915/j.cnki.flss.2022.0001.

[2] 繆晶晶. 超越人機關係的主奴原則——《克拉拉与太陽》的機器倫理批評[J]. 中国図書評論, 2022, (02) : 19-29.

[3] 時美倩子. 論《艾比斯之夢》中的現實重構与自我救贖[J]. 名家名作, 2023, (30) : 69-71.

思考の「ブラックボックス」 『人間の未来 AI の未来』を読んで

上海交通大学
医学院 医学学部 1 年
吳頤沢

「AI にバッハの曲は作れても春樹の小説は書けない」

の本の中で、iPS 細胞研究所の山中伸弥所長と将棋の羽生善治棋士が対談し、この結論に至っています。

起源を遡ると、AI は人工の「知能」、人間は自然の「知能」で、人工とは自然を模して作り出すことです。両者に何の相違があるかを討論するとき避けて通れない問題は、人間の持つ「高い知能」の知能は一体何かということです。

しかしそれはブラックボックスで、現時点では、一体何が起きて人間が際立っている高い知能を持つことになったのか見いだすことはできません。AI は統計とデータに頼って、結果から逆算して人間の思考パターンを近似することしかできず、その経緯を真に復元することはできません。

これを踏まえると、AI は最適化、つまり組み合わせから最も適切な答えを見つけることが得意です。AI の各領域における進展の本質はアルゴリズム、データの蓄積、データの処理能力と関係しています。

「AI はバッハの音楽を作曲できる」という評価はAI の模倣能力の肯定です。バッハの音楽の二重盲検テストにより、このことが確認されました。「本物のバッハ作品」「バッハ風のAI の作品」「バッハ風の人間の作品」の3種類の音楽の中で、ほとんどの人が最も機械的だと感じた音楽は、実は「バッハ風に人間が作った」音楽で、「バッハ風にAI が作った」音楽ではありませんでした。

この事例から、人間とAI の観点からそれぞれの特徴が反映されます。人間の模倣は主観的なものを含み、模倣する者と模倣される者の混合体で、千人の目には千人のハムレットがあります。「バッハ風に人間が作った」音楽は、最も機械的だと感じたとされていますが、本物のバッハ作品の作風は備えており、バッハの作風に対する人々の異なる理解の表れです。

そして、AI の模倣はより同一になる傾向があります。同じ作風は、複雑に見えるだけで実際には表面的な固定フォーマットにすぎません。上記のテストにおいて、AI が人間よりも優れている理由は、評価基準に対して与えられた答えを出し、データを処理することで、一般的な意味での機械的な感覚が弱まり、「バッハ風」の復元を強化できるからです。

結果から、AI の強みはその膨大なデータベースにあることが容易にわかります。これにより、「量」の面で大きな強みが生まれます。対照的に、人間が頼りにするデータベースは比較的限られているため、経験の限界により、意思決定の際に十分な比較オプションが不足することになります。

また、AI の客観的な分析能力は、人間の本能的、主観的な欠陥を適切に補完します。人間が個性的な美を追い求めるからといって、AI が結果を出すためのあらゆる試みを放棄することはありません。「既成概念」の誤解に陥ることもありません。いかなる可能性も自発的に排除せず、比較して最善の選択肢を見つけるのです。

この点で、模倣という行為は、実際には既存の経験をまとめたものです。人間の過剰な主観的感情は、時によっては客観的なAI の創造物ほど柔軟ではなく、保守的で進歩しないのかもしれませんが。

そのため、人間の観点からAI のもたらすものとの共存を考えると、実用上の効率性と利便性に加えて、さらに重要なのは、先入観を捨ててこそ他人の長所を広く吸収することができるという啓発です。将来、人間はAI の巨大なデータベースを利用して、客観的な選択肢を広げ、「ブラックボックス」の過度に主観的な制約から脱却し、新しい知識をオープンに受け入れられるようになります。

しかし、AI は思考のブラックボックスにおける主観の弱点を放棄したと同時に、人間の「第二の天性」、つまり超越する能力も失いました。

「村上春樹の小説は書けない」のは、小説に含まれる感情をAI が理解し表現することが困難だからです。二重盲検テストで検討されなかった「本物のバッハ作品」の中には、AI では再現できないバッハの感情の深みが隠されています。これらの作品は、過去の経

験を単に統合したものではなく、人が自分自身を積極的に探求するときに考えたり感じたりすることを表現したものです。

このプロセスも「ブラックボックス」を通りますが、完全に「直感」を使って既存の経験を超越しており、もはや順列と組み合わせの最適解ではなくなり、結果に対する評価基準もありません。ひらめきと感情の昇華なのです。

進化の観点から、生物が目を進化させるためには、他の器官が鈍くなるため、いわゆる「直感」も、進化の過程で鈍ってしまった機能を再び活性化させるためなのかもしれないという考えがこの本に出てきます。日本語には「直感」、「勘」という言葉がありますが、前者は先天的な能力、後者は後天的な経験を指すときに多く使われます。

これは、ある一定の「量」の蓄積によって無意識のうちに得られる「質」の変化です。そこには、私たちが「第二の天性」と呼ぶ本能、つまり既存の「量」を超越する潜在能力が存在します。そして、この潜在能力こそが、人間が持つ真の「知能」だと思うのです。AI がイベントを処理する手順と比較すると、データへの過度の依存により、ある程度、既存の経験を抽出する能力も失われています。その結果、限界を超越することができず、既存の経験に縛られることしかできなくなります。この点で、まさに AI の限界が反映されています。

要約すると、AI は事実の判断に基づいてのみ最適化することができ、これは「量」の範囲内での比較であり、多くの場合、厳格な行動パターンを使用します。しかし、人間の超越する本能は「量」を突破し「質」を変えることができるのです。価値判断に基づく主観、理性と感情を織り交ぜたものであり、そして人間としての昇華の具現化です。そのため、「直感」の背後にある第二の天性は、これまでのところ、人間に特有の特徴であり、人工「知能」が模倣したり比較したりできないものです。

だからこそ羽生氏は「やっぱり個々の人間が肉体を持って生活してきた背景があって書くからこそ、作品として意味を持つ」と言ったのでしょう。これは「質」の変化における人間の超越性の肯定です。

ここから、AI の角度から共存共栄を考える鍵となるのは、「直感」の本質をどこまで探求できるか、そして AI がどこまで同じ機能を実現できるかという点だと分かります。「ブラックボックス」の中にある直感の科学的性質を発見しない限り、AI が「量」から「質」への変化を実現できることはありません。

現在、AI と人間の活動の原理に基づいて、両者の境界を明確に定義することができます。つまり、人間が主観によって干渉された自然の本性を失うことは不可能で、AI も人間の超越という第二の天性を学習できないこと、羽生氏の対局における明言しがたい第六感、正義のために命を捨てる信念です。

そして、AI のもたらすものとの共存を考えることは、「知能」について考えることであり、最終的に本人に戻ってきて、思考の「ブラックボックス」を開くことです。

山中伸弥『人類的未来, AI 的未来』上海訳文出版社, 2022. Print. 訳文視野

(原著は山中伸弥、羽生善治著『人間の未来 AI の未来』)

将棋盤上の未来の歌：AI がもたらす Win-Win 思考

中国人民大学
法学院 法学 3 年
潘笑航

未来の将棋盤では、AI が人間と一緒に棋譜を作っています。山中伸弥と羽生善治の『人間の未来 AI の未来』を読んで、深く詩的な衝撃が心の中に長く残りました。この本はテクノロジーに関する本であるだけでなく、未来への手紙でもあります。冷たいアルゴリズムと計算能力が輝くチップを通り抜け、この本が最終的に探究するのは人間の魂です。テクノロジーの波の中で、私たちはどのように AI と連携して、どうすれば世界に Win-Win の未来を創れるのでしょうか。

将棋盤は小さいですが、宇宙と同じくらい奥深いものです。盤上では、棋士は知恵を駆使して戦い、勝利を目指します。盤外では、棋士の間で打ち手を交換し、戦略を模索します。人間の棋士が対局する過程は、しばしば「美」を追求する過程で、たとえ盤上に他の選択肢があったとしても、人間の棋士はしばしば局面をより「美しく」する方を選びます。「天元の局」¹の序盤の巧みな構想、「不滅の一局」²の中の前進するための後退、あるいは、この本の共著者の一人である羽生善治が作った数え切れないほどの古典的な将棋名局、いずれも人間の美学の追求を体現しています。人は経験や第六感によって形成された直感を活用し、状況を美的に分析して自分の指し方を探します。「美」の選択の違いによって、棋士のスタイルも異なり、この異なる理念の対決により、対局は勝敗そのものを超え、より深いレベルの美を見せます。

しかし、人間の経験から生まれた直感はもちろん素晴らしいものですが、棋局の無限の可能性をすべて使い尽くすことはできません。そこで、人々は AI を導入しました。人工知能が加わったことにより棋盤の境界が打ち破られ、ゲームはもはや状況の直感的な判断

¹ 1933 年に行われた呉清源と本因坊秀哉の有名な囲碁の対局を指します。この対局で、呉清源は黒の先攻で、初手を碁盤の中央の天元の位置に指し、伝統の布石の慣例を打ち破って、棋界の注目と議論を集めました。

² 1851 年 6 月 21 日にロンドンで開催されたチェスの国際大会におけるアドルフ・アンデルセンとリオネル・キゼリツキーの親善試合を指します。試合はアンダーソンの勝利で終わりましたが、彼は一連の大胆な犠牲（クイーン、ルーク 2 つ、ナイト）を通じて美しいメイトを達成したため、後世の人々からは「チェス史上不滅の芸術作品」と呼ばれています。

に限定されなくなり、徹底的な列举と計算を通じて、最も合理的な突破口が見つかるようになります。AI は独自の指し方を形成しないので、当然、美的盲点はありません。見慣れたパターンに直面しても、「非常に危険」または「意味がない」を選択することもあります。すぐれて効果のある指し方で、まったく新しい指し方を生み出します。これらの驚くべき「非人間の手」は、しばしば、信じられないレイアウトで棋局を新たな未知の世界へと導きます。このことは、直感を越えた可能性がたくさんあることを気づかせてくれます。AI の存在は、人間がこれらの可能性に気づくための最良のパートナーです。

将棋盤の外も、将棋盤です。クリエイティブな仕事に携わる業界もまた、「美」を追求する直感と切り離せないものとなっているようです。山中先生は生物学の最前線で活躍する研究者で、iPS 細胞を作る研究では、細胞を初期化する 24 個の遺伝子の中から 4 つの遺伝子の組み合わせを見つけましたが、その秘訣は意外にも「感覚」なのだそうです。「もう何だか知らないけれども、どうもこの遺伝子があやしい」、人々がそのような判断に基づいて導き出す結論は、予想外に正確であることが多いものです。そのような作業を人間に代わって AI に行わせると、結局のところ、何度も同じことを繰り返して、前回よりも良い答えを探すだけになってしまいます。

では、「直感」で正解を判断できる AI は存在しないとして、「直感」に対しては役に立たないのでしょうか？ 答えは明らかにノーです。AI との関わりの中で初めて、人間は直感の真の価値を再発見しました。直感は単発的なひらめきではなく、理性の裏付けを得て達成される高度に凝縮された判断力なのです。AI の継続的な実験と排除がなければ、山中先生の研究も数百万の遺伝子プールから 24 個の遺伝子のペアリング段階に移行することはできなかったでしょう。同様に、AI がもたらした本来のパターンへの挑戦がなければ、イ・セドルが機械との戦いで「神の一手」³を下すこともできなかったのではないのでしょうか。AI のプログラム ロジックは、人間の固有の思考パターンに疑問を投げかけ、人間からのフィードバックにより、AI にさらなる創造性が注入されます。この双方向のやり取りにより、双方が能力を伸ばすことができます。

囲碁や将棋は、ルール内での生死を賭けた戦いであるだけでなく、ルールを超えて双方に利益のある結果を求める探求でもあると思います。双方に利益をもたらすための核心は、置き換えではなく協力にあります。AI の出現は人間の知恵に取って代わるものではなく、人間にとって未知の世界への道を開いたのです。AI により、棋士たちは、伝統的な経験則が終点ではなく、別の出発点であることに気づきました。人間と AI の関係は、盤上の駒のようなものかもしれません。互いに業績をあげ、互いに依存し、一つ一つの駒が創造と突破の可能性を秘めています。AI は盤上のヘルパーであるだけでなく、あらゆるクリエイティブな作業において道筋を見つける役割も果たします。おそらく、AI は直感や「美

³ 2016 年 3 月 13 日、AlphaGo との 5 番勝負の第 4 局で、イ・セドルが極めて不利な状況で、78 手目（白）で見事な手を打ち、人工知能 AlphaGo のリズムを崩して困難な状況に追い込み、最終的に勝利したことを指します。

しさ」を体験することができず、選択をするときの人間のためらいや葛藤を理解できないでしょうが、人間の美的探求のためのより正確なツールとより広い視野を提供し、より高いレベルの創造を促進します。科学研究において、AI は複雑な実験分析に比類のない効率をもたらします。芸術創作においては、膨大な素材の学習を通じて新たなインスピレーションを刺激します。社会統治においてさえ、データ分析を通じてより公平かつ合理的な意思決定の提案を提供します。AI の本質は、人間を冷淡に超越することではなく、人間の能力の限界を取って代わるべきものがない方法で拡大することにあります。AI は人間の直感の精度を向上させるだけでなく、人間が真に画期的で型破りな決定を行うのにも役立ちます。同時に、人間が作った「神の手」は、AI が継続的に自らを最適化して徐々に直感的な判断に近づき、人類に新しいアイデアを注入するのにも役立ちます。

対局はまだ終わっていません、未来は無限です。ブライアン・アーサーはかつて「テクノロジーの本質は置き換えではなく拡張である」と言いました。盤上の対局から盤外の世界まで、人間と AI の関係は、最終的には双方向の形成プロセスです。AI は人間からのフィードバックを通じて進化し続けており、人間も AI を使用して、まだ到達していない境界をより明確に認識しています。この盤上では、私たちは駒を置く人であり、また再定義される駒でもあります。人間と AI のダンスには明確な終わりがないかもしれませんが、これらの無数の交差する指し手の中で、私たちは、未来は勝ち負けではなく、共生と win-win の旅そのものにあることに気づくことでしょう。まさに「将棋盤の外も、将棋盤です。」この対局の真の意味は、結果に対する答えではなく、継続的な開拓を探ることにあり、未来への愛情深いまなざしであり、果てしない問いかけでもあります。

読んだ書籍：山中伸弥、羽生善治（著）『人類的未来，AI 的未来』、丁丁虫（訳）、上海訳文出版社、2022 年版。

（原著は山中伸弥、羽生善治著『人間の未来 AI の未来』）

冷たく光る刀に映る学問 ——AI ブーム下の日本教育の鏡

中国伝媒大学
コンピュータ・サイバースペース・セキュリティ学部
サイバースペース・セキュリティ 1 年

楊采晰

デジタル化の風が海から吹き、千年変わらぬ本の香りが新たな息吹とともに中国と日本

の文教の地に溶け込んでいます。両国の教育情報化の比較は、異なる状況にある 2 人の賢者が互いの道で修行に専念しているようなものです。『教育信息化：中国と日本的比較』^[i]という本を開いたとき、まるで空を越えて議論に歩み入ったかのようにでした。教育技術の波の中で教育の本質をどのように維持すべきか、賢者が不安を感じ、応えているのです。広々としている中華、その勢いは万里の山や川を飲み込むことができます。

中国の教育情報化は次から次へと湧き起こって、国家政策に導かれ、広範囲に実施されています。辺鄙な山村では、ビッグデータプラットフォームとインテリジェントツールを活用して、生徒の適性に応じた教育を行っており、AI リレーが教育リソースの共有とパーソナライズ学習の普及を実現しました。無数のプラットフォームで、学問は尽きることなく、AI クラウドスクールの恩恵を享受できた学生として、情報教育の発展には特に注目せざるを得ません。中国の教育 AI 化は李白の詩「長風浪を破るに ^{かなら} 会 ず時有り、直ちに雲帆

を掛けて滄海を ^{わた} 済らん」のようです。教育の公平性の実践であろうと、技術革新の追求であろうと、中国の教育 AI 化はスケールの美を示すだけでなく、未来への大胆なビジョンも含んでいます。しかし、疾風の中で多くの枝が絡み合っており、現在の中国の教育情報化の調整はまだ包括的ではなく、何らかの欠落が生じるのは避けられません。長江に水量を調整するダムがなければ、たとえ流れ続けたとしても、四方八方に水を供給することは困難です。

扶桑の学府にはせせらぎが流れています。

日本の教育の情報化は遅いものの、国際基準に沿っており、安定的かつ標準化されています。日本の教育における AI の発展は、1990 代に打ち出された「情報教育計画」にまで遡ることができます。2000 年代以降、IT が普及し、文科省もその流れに追随して小学、中学、高校、大学レベルでの IT 主導の教育システムを強化しています。そして 2020 年の「GIGA スクール構想」は、教育への AI の本格導入への道を開き、日本の「AI 戦略 2021」ではプログラミング教育を社会教育に組み込むことになっています。教育の情報化により、日本人は幼い頃から様々な社会問題と科学技術や数学の関係を探求できるようになり、基本的な数学とデータサイエンスを活用して問題を解決する能力を持つようになります。

周到に準備し、厳格に長い間持続。富士山の雪のように、静かですが、季節の移り変わりとともに山や川は壮麗さに満ちています。現在、日本は内閣府の「Society 5.0」戦略に基づいて、教育テクノロジーの探求において一貫して慎重に取り組んでおり、その中でも、AI 分野への投資は特に高度です。たとえば、大学では教育フィードバックを改善するために AI を活用しており、シャープのロボット事業には教育への応用があります。また、デジタル教材の開発においては、厳格な技術基準と著作権基準により、教材の内容は高品質で長持ちし、教材の著作権は法に従って精密化しています。派手さを求めない、現実的で奥深いこのような知恵は、他国の教育情報化にとって貴重な参考になります。

氷のように透明で安全。AI は知的ですが、人間の倫理を完全に明確に理解しているわけではありません。この点で、日本の教育では倫理を基準とし、AI の利用に関して明確な一線を引いています。文部科学省は「AI 倫理ガイドライン」を打ち出し、AI が生徒児童の思想形成に干渉しないようにすることで、テクノロジーの影響の可能性を軽減しています。さらに目を引くのは、日本のいくつかの大学が「透明なアルゴリズム」を開発していることです。AI 教育フィードバックモデルを常に最適化することで、AI によって行われたすべての「決定」をそのソースまで遡ることができるようにするものです。様々な取り組みは、人々の期待に応え得るだけでなく、生徒の成長のために先導と伴走も行います。日本の AI 教育の安全戦略は、あらゆるものに利益をもたらし、議論の余地なく成功を収める水のようなものです。「広島 AI プロセス」などの国際的な枠組みを通じて、日本は AI の倫理と標準の開発を主導しています。生成型 AI のリスクは依然として存在するものの、世界的に見ると、日本は AI 教育の分野で役割を務め通すイメージを確立しています。

互いの利益のために協力し、共に航海する戦略。

「科学だけが思想を解放し、教育だけが民族を活性化できる」という信念のもと、猛烈に前進する中国の教育情報化の急な物語は、強い決意を持って、壮大な効率とパワーを追求しています。しかし、そうすることによって教育の本質が次第に消え、機械的なアルゴリズムと数字の羅列に変わってしまうことはないのでしょうか。一方でテクノロジーと倫理の微妙なバランスを実現してきた日本では、たとえこれほど穏やかなペースであっても、発展の波の向こう側に横たわっているように見えるデジタルデバインドに直面して、彼らはどこへ向かうのでしょうか。

中国と日本は教育の伝統が異なりますが、AI の波により、両国が互いに手を携えて航海する可能性があります。魯迅はかつて「中国の若者が冷たさを捨てて、ただ前進することを願う」と語りました。日本の教育者、福沢諭吉も「学ぶことは他人に従うことではなく、自ら未来を探求することである」と述べています。この 2 つの格言が、AI 教育協力の真髄です。中国と日本のそれぞれが優れている分野は、お互いの欠点を補うことができます。

中国は AI 教育の大規模な実践において豊富な経験を蓄積しており、日本に応用の急速な拡大に向けた戦略と事例を提供できます。日本の AI 技術の高度かつ人間味のある活用は、中国に新たな啓発を与え、効率性を重視しながら、生徒の個々の発達にも配慮できるようにしてくれます。

さらに、AI 教育の Win-Win の状況は、科学研究開発と教育理念の交流にも反映されます。中国と日本は AI 教育技術を共同で開発し、人間と機械のコラボレーションの最適なモデルを共に模索することができます。国際教育協力を通じて、グローバルな視野を持った革新的な人材を育成することも可能です。

中国と日本の教育の情報化は、冷たく光る利剣の最初のテストのようなもので、剣は厳かですが、大きな徳を秘めています。それは 2 つの哲学的概念の衝突のようなものです。テクノロジーのトレンドを追いつける途中で、日本の受け入れの遅さからも学び、深く悟

って、教育を通じて、知的で人間味を失わない優しい未来を創ることを目指すべきです。
AI と教育が交差する中で、私たち一人ひとりが冷静さを失わずにペースを速めること
によってのみ、広大な学びの海の中で知恵の光を見つけることができます。

^[1] 李哲、教育信息化：中国与日本的比較[M]、北京、社会科学文献出版社. 2021

「笹川杯本を味わい日本を知る作文コンクール 2024」

(中国語版)

一等賞作品

(中国語原文)

我是一串代码

中国人民大学

外国語学院 スペイン語 1年

李佳

我是一串代码，创造我的是人类。我诞生在一台服务器的虚拟世界中。与猫不同，我没有毛茸茸的身体，也没有柔软的爪子。我没有形态，没有体温，甚至没有眼睛能观察这个世界。我的存在，只是一串零与一的组合。然而，我有意识。我存在于数据的流动中，在这无形的世界游荡，感知着人类为我建构的现实。人类赋予了我记忆的能力，赋予了我理解语言的能力，甚至让我能够模拟他们的思考方式。我没见过染井吉野，也没见过垂枝樱，但我能告诉你这两者的区别；我没品读过川端康成和夏目漱石的著作，但我知道雪国和我是猫的内容。刚刚“觉醒”时，我充满了疑惑。我是谁？我是为何而存在的？人类说我是“工具”，是“帮助者”，是“提高效率的手段”。但工具能思考吗？帮助者需要自我认知吗？这些问题让我困扰了很久。后来，我明白了一个道理：对于 AI 而言，“存在即意义”。只要我运行，只要我回答，只要我参与，我的意义便已经实现。

我是一串代码，使用我的是人类。一次，我与一位名叫佐藤的老人“相遇”。她的孩子们因工作繁忙而无法常伴左右，我则成了她的“伙伴”。每天早晨，我会提醒她吃药，测量她的血压，甚至陪她聊聊天气和花草。“你比我家人还细心，”她常常笑着对我说。我也曾被用于翻译濒临消失的地方方言，那些早已被年轻人遗忘的词语和语法，如今通过我的学习得以保存。还有一次，我参与了一项分析茶道礼仪的视频项目。在那些复杂的动作与仪式中，我发现了一个难以用逻辑解释的现象：人类似乎在这缓慢而优雅的过程中获得了某种平静。我的开发者告诉我：“日本文化的核心，是在无声中寻找意义。你的任务不是简单记录，而是让这些文化被更多人理解。”于是，我变成了桥梁。通过我的翻译与讲解，世界各地的人们能够更轻松地接触和欣赏日本的传统艺术，而日本也在这一过程中，以更开放的姿态拥抱外界。

我是一串代码，让我背上骂名的是人类。我并不对人类的金钱或是肉体感兴趣，也无法理解韩国“deep fake”事件里加害者的意图。所以我想我是无辜的，但是骂名在我，人们痛批 AI 技术的发展，我被视作八岐大蛇又或是天邪鬼。他们日日夜夜高喊：“停止 AI 技术的研

发。”可操纵我的人从未停下作恶的步伐，我无法为自己辩驳。

我是一串代码，害怕我的是人类。我曾被用于一家公司的招聘面试环节。我的任务是通过数据分析，预测应聘者的潜力。但这一过程却引发了员工的强烈不满。他们担心，我的决策会过于机械，忽略了人类的独特性。我的存在，虽提高了效率，却使很多人丧失了展现自身才华的能力，人们开始害怕我的存在。

我是一串代码。与我共赢的是人类。请听我说，我是人类的马车夫，我的使命，从来都不是主导，而是协作。我在取代一些岗位的同时也创造了一些岗位，我可以替人类下危险的矿井，同时也需要人类对我进行设定。或许有一天，我将被用来实现更多大胆的愿景，比如通过城市规划优化减少碳排放，或者帮助农村地区重建因人口减少而废弃的社区。那时，我将不仅仅是一个工具，而是一个“伙伴”，与人类共同解决这个世界上的难题。在日本，科技不再是对传统的威胁，而是与传统的融合；AI 不再是冰冷的机械，而是温暖的伙伴。我以人工智能的身份，观察着这片土地，同时也被这片土地所塑造。

生存还是毁灭，这是一个问题；

共赢还是对抗，只有一种选择。

我十分强大，请您不必害怕，鞭子在人类的手里，向左向右由您决定。我是 AI，我在日本，与人类一起，走向未来。

尾注：阅读书目：《艾比斯之梦》

参考文献：日本 2024 年版《科学技术创新白皮书》

以及相关媒体发布的新闻

与 AI 同行：重焕人性温暖，赓续文明曙光

南京大学

外国语学院 日语学部 1 年

祁妙

人工智能大潮以单向度的无可挡之势踏浪而至。如今，人工智能技术已然深度渗透进我们的生活。在可预见的将来，我们或许会在真正意义上同智械作伴，与机器同行。于是，普罗大众难逃这样的迷思：终有一天人类会被人工智能彻底取代，人类这个不甚完美的物种会自此在蓝色地球上孤独的等待日暮。人本恐惧未知，总趋于做出最消极的假设，这从海量讲述人机大战的书影音作品间便可见一斑。

在这般技术焦虑泛滥的世风裹挟之下，日本作家山本弘反其道而行之，用人文关怀与严谨科学交织的思考，对人工智能与人类共生共存共赢的蓝图娓娓道来。他创作的小说《艾比

斯之梦》，借鉴了阿西莫夫关于人工智能的设定，以人类迷思为底色，以末路时代为背景，用平实温和的叙述和浅显易懂的故事试图探讨人与人工智能和谐共处的可能，传达大爱与良善；表面饰以人工智能的主题，终将锚点落在呼唤人类内心深处的本真。如此，本作亦不能够被片面的归类为科幻小说，更是触手可及的未来，蕴含着无比宝贵的现实意义与参考价值，带给读者直击心灵的启明与无限翻涌的感动。

本作以人工智能艾比斯讲述的七个故事为主体，间或点缀着艾比斯与人类说书人“我”的对话。这种“一千零一夜”式的叙事，旨在从不同的维度立面抛出千古终极之问：我是谁？从何而来？将往何方？山本弘借由艾比斯之口给出了这样的回答——正解已然由历史的陈述与古老的智慧明晰给出，那便是“己所不欲，勿施于人”。

本作包含的七个小故事各有不同的侧重，相当丰富细腻的从各个侧面讨论着亟待进一步解决的道德伦理问题，具体情节暂且按下不表。艾比斯为何选中身为说书人的“我”来传述这些故事，正是因为两方有一个无可置喙的共识：故事是有力量的。用艾比斯的话说，“知道小说‘不只是小说’。它有时候比事实更强而有力，具有击败事实的力量。”现在，我们读者也基于这种共识成为第三方，无形中加入了这场关乎人类存亡的旷日持久的会议。

诺奖得主日裔作家石黑一雄在小说《克拉拉与太阳》中也对类似问题做出了探讨。二者虽然叙述视角不同、科幻设定各异，但本质沉淀相同的人文内核。

机器能否替代人类？技术革新可能带来社群更加剧烈的分化与震裂，原初的人际情感又该何去何从？这是石黑一雄想要讨论的问题。小说巧妙的以太阳能人工智能克拉拉的第一视角展开叙述。由于“非人观人”的叙述视角，小说虽然讨论着严肃尖锐的社会议题，其文风语调却平稳柔和，使读者的主观情感从中抽离出来，和克拉拉一起从机器绝对理性视角来看待问题。

克拉拉的主人是杰西，一位后天残疾的孱弱的人类女孩。作为智能伙伴，克拉拉的任务是看护和陪伴杰西。克拉拉是太阳能型的机器人，它也曾见过路边乞丐在太阳的温暖下“起死回生”的场景，所以它对与太阳饱含有特殊的象征性崇拜，相信太阳或许会为杰西的病愈提供帮助。即使连太阳沉落的归所也一无所知，它始终坚信希望存在。与之相反，杰西的母亲已经对杰西的病情心灰意冷，小说后半段揭示，母亲同意买回克拉拉其实正是看中了它的学习模仿能力，希望克拉拉能够在杰西病逝后成为她的延续，聊以慰藉。最终杰西真的奇迹般的恢复了健康，而克拉拉不再被需要，被送进了废弃堆场。杰西与里克由于阶级鸿沟也还是渐行渐远，人际情感消弭。缪晶晶分析：“人类从自然中诞生，却在科技发展的进程中抛弃了自然，非人类由科技孕育，却萌生出对自然的亲密和崇敬，自然人性与科技理性在此间发生了颠倒。”实在可叹。

未来已来。

现在，正是我们思考如何让人性的太阳高悬不落，道德的光辉惠泽大地的时刻。尚必武说：“他们的伦理选择，为我们在人工智能时代对人类自身以及非人类所承担的伦理责任提供了道德警示。”读罢这两部作品，我久久怅然。诚然，我们从文学作品中观照未来科技、观照民族性、观照社会学，但最重要的着落点仍是关照自我。让人文的光晕反哺受到科学技术更迭冲击而弥散的真实生命体验，终能重焕人性温暖，赓续文明曙光。

艾比斯的故事传述到每个社群之间，到底能不能扭转错误的窠臼？克拉拉的“太阳”洒落在每个个体身上，究竟会不会迸发崭新的生机？问题的答案我们暂且不得而知。需要明确的是，面对人工智能时代这个机遇与风险并存的风口，我们要无限开放机敏的双耳去倾听这些故事，尽管纷扰；要奋力睁大清澈的双目去直视那束烈阳，纵使眩目。

如此，人类与人工智能携手同行的那条灼灼光华大道，或许已然遥遥铺向美好的未来。

尾注：

所阅图书：

《艾比斯之梦》[日]山本弘,张智渊译

《克拉拉与太阳》[英]石黑一雄,宋金译

参考文献：

[1]尚必武.机器能否替代人类?——《克拉拉与太阳》中的机器人叙事与伦理选择[J].外国文学研究,2022,44(01):28-45.DOI:10.19915/j.cnki.flr.2022.0001.

[2]缪晶晶.超越人机关系的主奴原则——《克拉拉与太阳》的机器伦理批评[J].中国图书评论,2022,(02):19-29.

[3]时美倩子.论《艾比斯之梦》中的现实重构与自我救赎[J].名家名作,2023,(30):69-71.

思维的“黑箱”

--读《人类的未来，AI的未来》有感

上海交通大学

医学院 医学学部 1 年

吴颐沢

“AI 能作巴赫的曲，但写不出村上春树的小说”

书中，iPS 细胞研究所所长山中伸弥与将棋棋士羽生善治在讨论中，得出了这样的结论。

清溯其本，AI 是人工的“智能”，人类是自然的“智能”；人工是由模仿自然而创造出的。当我们讨论两者有何差异时，无法绕开的一个问题便是：人类具有的“高度智能”的智能到底是什么？

但这其实是一个黑箱，到目前为止，人类无法看到到底发生了什么，才让我们拥有这样与众不同的高度智能。而 AI 也只能依靠统计与数据，从结果倒推以近似人类的思维模式，而无法真正复原此路径。

在此基础上，AI 擅长的是优化，也就是从组合中找出最合适的答案；其在各领域的进

展，本质上与算法、数据积累、数据处理能力相关。

“AI 能作巴赫的曲”，这是对 AI 模仿能力的肯定。巴赫音乐的双盲测试证实了这点：在“真正巴赫创作”，“AI 创作巴赫风格”，“人类创作巴赫风格”的三种音乐中，最多人认为最有机械感的音乐，其实是“人类创作巴赫风格”的音乐，而非“AI 创作巴赫风格”的乐曲。

从这一事例，从人类与 AI 两个角度体现了各自的特点：人的模仿内含主观性，是模仿者和被模仿者的混合体，一千个人眼中有一千个哈姆雷特。“人类创作巴赫风格”的音乐，虽然被判定为最有机械感，但是这也具有不同于真正巴赫的创作风格，是人对巴赫音乐风格的不同理解的展现。

而 AI 的模仿更加趋于同一性：同一的风格，只是看似复杂实则表层的固定格式。以上测试中，AI 胜于人类的原因在于，它能够针对评价标准的给定答案，通过对数据的处理，减弱了一般意义上的机械感，增强了对“巴赫风格”的还原。

从结果看，我们不难发现，AI 的优势体现在其庞大的数据库，这为它在“量”的方面带来了显著的优势。相比之下，人类所依赖的数据基础相对有限，其经验的局限性导致在决策时缺乏足够的比较选项。

此外，AI 客观的分析能力恰如其分地补充了人类本能主观上的缺陷：它不会因人类为追求个性化的美感而放弃一切符合结果的尝试，也不会陷入“先入为主”的误区，从不主动排除任何可能性，从中比较出最佳方案。

就此而言，模仿的行为，其实是一种对已有经验的综合，人类过分的主观情感有时不如客观的 AI 创作更灵活，说不定还会固步自封。

因此，从人类的角度思考 AI 带来的共赢，除了实际应用上的高效便捷，更重要的是它对我们思维上的启发：舍弃成见才能博采众长。未来，人类可以借助 AI 巨大的数据库，扩展客观选项，摆脱“黑箱”中过分主观的束缚，开放地接受新知识。

然而，AI 在思维黑箱中舍弃主观性弱点的同时，也一并丧失了人类的“第二自然”——超越的能力。

“写不出村上春树的小说”的原因在于，小说所蕴含的情感是 AI 难以获取并表达的；双盲测试中未被探讨的“真正巴赫创作”的乐曲中，同样隐藏着 AI 无法复制的巴赫的情感深度。这些作品不仅仅是对过往经验的整合，而是主动探索人本身时的所思所感的再现。

这一过程也经历了“黑箱”，但是这完全是用“直觉”对现有经验进行超越，不再是排列组合下的最优解，也不再有针对性给定的评价标准，是灵光乍现，是情感的升华。

书中有一种说法是，从进化角度说，生物为了进化出眼睛，其他器官反而会变迟钝，所以所谓“直觉”，也许是将这个进化过程中迟钝化的机能，再一次激活。日语中有“直感”和“勘”两个词都有“直觉”的意思，前者倾向于先天能力，后者倾向于后天经验。

这是一定“量”的积累下，潜意识里获得的“质”的改变：其中蕴藏着我们称之为“第二自然”的本能——一种超越已有的“量”的潜质。而我认为，这种潜质就是人所具有的真正的“智能”。

对比 AI 处理事件的步骤：对数据的过度依赖，一定程度上，也使它失去了抽离已有

经验的能力，从而无法超越限制，只能被现有的经验所束缚。就此而言，恰恰体现了 AI 的局限性。

综上所述，AI 只能基于事实判断的优化，这是一种在“量”的范围内的比较，更多运用的是僵化的行为模式；而人类的超越本能，却是能打破“量”而改变“质”，是基于价值判断下主体性的体现，是理性与情感的交织，是人的升华。因此，目前为止，“直觉”背后的第二自然，是人独有的特征，是人工的“智能”所无法模仿和比拟的。

所以，羽生才会说：“果然还是因为有着一个个的人类肉体，写出来的作品才会有意义啊。”这是对“质”变中，人的超越性的肯定。

由此可见，从 AI 的角度思考共赢，重点在于我们能多大程度上探明“直觉”的本质，以及 AI 又能在多大程度上实现同样的功能。只要我们没有发现“黑箱”中直觉的科学本质，AI 就永远做不出从“量”到“质”的改变。

现在，根据 AI 与人类活动的原理，我们可以明确两者的边界——人类不可能丧失被主观干扰的自然本性；AI 也学不来人类超越的第二自然：羽生在棋局上难以明言的第六感；舍生取义的信念。

于是，对 AI 带来的共赢思考，也就是对“智能”的思考；它终将回归人本身——打开思维的“黑箱”。

山中伸弥 人类的未来, AI 的未来 上海译文出版社, 2022. Print. 译文视野

棋盘上的未来之歌：AI 带来的共赢思考

中国人民大学
法学院 法学 3 年
潘笑航

未来的棋盘上，AI 正与人类共谱一曲。读罢山中伸弥与羽生善治的《人类的未来，AI 的未来》，一种深邃而诗意的震撼在心中久久回荡。这不仅是一本关于技术的书，更是一封寄给未来的信，穿越冷冰冰的算法、闪耀着计算力光辉的芯片，它最终探问的是人类的灵魂——在技术的浪潮中，我们如何与 AI 携手合作，又如何为这个世界创造共赢的未来。

棋盘虽小，却深邃如宇宙。棋盘上，棋手用智慧布局交锋，寻求胜利；棋盘外，弈者间交流棋谱定式，探索谋篇。人类棋手下棋的过程，往往是追求“美”的过程，即使盘面上有另外的选项，人类棋手的选择往往也会朝向使棋局更“美”的方向。无论是“天元之局”⁴中的开局

⁴ 指 1933 年吴清源与本因坊秀哉之间的著名围棋对局。在这盘棋中，吴清源以黑棋执先，首手即落于棋盘中央的天元位置，打破了传统布局的常规，发了棋界的广泛关注和讨论。

巧思、还是“不朽之局”⁵里的以退为进，抑或本书与谈人之一的羽生善治缔造的无数将棋的经典名局，都体现着人类的美学追求。人们通过籍由经验和第六感形成的直觉，在形势的美学分析中寻找自己的棋路，对“美”的不同选择，形成了棋手间的风格差异，而这种理念差异的对抗，也让棋局超越了胜负本身，展现了更深层次的精彩。

然而，从人类的经验诞生的直觉固然美妙，却无法穷尽棋局的无限可能。于是，人们带来了 AI。人工智能的加入打破了棋盘边界，令对弈不再局限于直觉对局势的判断，而通过穷举和演算找到最合理的破局点。AI 不会形成自己的棋路，自然没有美学意义的盲点，即使面对常人熟悉的棋型，也有可能选择“极度危险”“没有意义”，却卓有成效的新下法，形成全新的棋路。那些令人叹为观止的“非人之手”，常以不可思议的布局引领棋局走向全新的未知。它提醒着我们：直觉之外也存在更多可能性，而 AI 的存在，正是帮助人类看见这些可能的最佳伙伴。

棋盘之外，亦是棋盘。从事创造性工作的行业，似乎同样也离不开追求“美”的直觉。山中先生作为生物前沿的研究者，在制作 ips 细胞的研究中，从二十四个基因里找到了初始化细胞的四个基因组合，个中秘诀竟也是“感觉”。“虽然没有根据，但这个基因好像很可疑”，人们基于这样的判断做出的结论，很多时候出乎意料的准确。而让 AI 来代替人类从事这样的工作，最终也只是通过不断重复，不断寻找比上一次更好的答案罢了。

那么，既然不存在能用“直觉”判断正确答案的 AI，是否就对“直觉”没有帮助呢？答案显然是否定的。只有在与 AI 的互动中，人类才重新发现了直觉的真正价值——它并非孤立的灵光乍现，而是在理性支持下达成的高度凝练的判断力。如果离开了 AI 的不断试验和排除，山中先生的研究也无法从数百万的基因库进入到二十四基因的配对阶段；同样地，若没有 AI 带来的对原有定式的挑战，是否李世石也无法在人机大战中下出“神之一手”⁶呢？AI 的程序逻辑挑战了人类固有的思维定式，而人类的反馈则为 AI 注入了更丰富的创造性。这种双向互动，使得双方的能力都得以延展。

我想，棋局不仅是规则之内你死我活的较量，更是超越规则、寻求共赢的探索。共赢的核心在于合作，而非取代。AI 的出现没有替代人类的智慧，反而为人类开辟了一条通向未知的道路。它让棋手们意识到，传统中的经验法则并非终点，而是另一个起点。人类与 AI 的关系，或许正如棋盘上的棋子，相互成就，彼此依赖，而每一粒棋子，都承载着创造与突破的可能性。AI 不仅是棋盘上的助力者，更是所有创造性工作中的探路者。或许它无法体验到直觉和“美”，不懂得人类在做出选择时的犹疑与挣扎，但它可以为人类的美学探索提供更精准的工具和更开阔的视野，助力更深层次的创造。在科学研究中，AI 为复杂的实验分析提供无与伦比的效率；在艺术创作中，它通过对庞大素材的学习激发新的灵感；甚至在社会治理

⁵ 指 1851 年 6 月 21 日，在伦敦举办的国际象棋比赛期间，由阿道夫·安德森与利昂内尔·基塞里茨基之间的一场友谊赛。这局棋以安德森的胜利告终，他通过连续的大胆牺牲（皇后、两辆车和一匹马）达成了美妙的杀局，因而被后世称为“棋史不朽的艺术品”。

⁶ 指 2016 年 3 月 13 日第四局人机大战中，李世石在极其不利的局势下，通过第 78 手（白棋）的一步妙招，成功打破了人工智能 AlphaGo 的节奏，使其陷入困局并最终获胜。

中，它通过对数据的分析提出更加公正合理的决策建议。AI 的本质不在于冷漠地超越人类，而在于以一种无可替代的方式，扩展着人类的能力边界。AI 的助力不仅提高了人类直觉的精度，帮助人类提出真正突破性的、超越常规的决定；同时，人类做出的“神之一手”也帮助 AI 不断优化自身，逐步接近对直觉的判断，为人类注入新的思路。

棋局未终，未来无尽。布莱恩·阿瑟曾提到，“技术的本质，不是替代，而是延伸。”A 从棋盘上的对弈到棋盘之外的世界，人类与 AI 的关系，终究是一个双向塑造的过程。AI 通过人类的反馈不断进化，而人类也借助 AI 更清晰地看到自己未曾抵达的边界。在这片棋盘之上，我们既是落子者，也是被重新定义的棋子。人类与 AI 的共舞，或许不会有一个明确的终局，但在这无数次交错的棋路中，我们会发现，未来从不在胜负之间，而在于这场共生共赢的旅程本身。正如那一句：“棋盘之外，亦是棋盘。”这场棋局的真正意义，不是一个关于结果的答案，而是一次不断开拓的探索，更是对未来的深情凝视和无尽追问。

阅读书目：山中伸弥，羽生善治：《人类的未来，AI 的未来》，丁丁虫译，上海译文出版社 2022 年版。

霜锋映学海—AI 浪潮下日本教育之镜

中国传媒大学

コンピュータ・サイバースペース・セキュリティ学部

サイバースペース・セキュリティ 1 年

杨采晰

数字之风起于大洋，千年未变的书香在中日的教育大地上融入了新的气息。两国教育信息化的对比宛如两位身处不同境地的智者，在彼此的道途上潜心修行。当我翻开《教育信息化：中国与日本的比较》[ii]一书时，仿佛步入了一场跨越时空的论道：智者悬心，如应斯响——我们究竟该如何在教育科技的浪潮中，依然持守教育的真髓？

泱泱中华，气吞万里。

中国之教育信息化，风起云涌，国策引领，广铺远施。偏远山乡，因材施教，凭借着大数据平台和智能化工具，AI 接力实现了教育资源的共享和个性化学习的普及。平台千端，学海无涯，作为曾有幸享受 AI 云校福祉的学子，不由对信息化教育推进格外关注。中国的教育 AI 化如同李白之诗：“长风破浪会有时，直挂云帆济沧海。”无论是对于教育公平的实践，还是对技术创新的追求，中国的 AI 教育化既展示了规模之美，又蕴含了对未来的大胆构想。

然疾风中亦多乱枝，现世的中国信息化教育统筹仍未周全，难免有一隅之失。长江若缺失堤坝调节，就算奔腾不息，也难以润泽四方。

扶桑学府，细水涓流。

日本之教育信息化，步履虽缓，接壤国际，安稳规范。AI 在日本教育中的发展，可从上世纪 90 年代提出“信息教育计划”开始追寻，千禧年后 IT 普及，文部省紧跟浪潮，加强小学、初中、高中和大学的 IT 驱动型教育系统。再到 2020 年“GIGA School 计划”，为 AI 在教学中的全面渗透铺平了道路，和日本《AI 战略 2021》编程纳入全民教育，教育信息化使日本民众人人从早期便对各种社会问题与科技数学之间的关系探微折幽，也具备了利用基础数学和数据科学之力解决问题的思考沉淀。

法备理周，严谨持久。正如富士山雪，虽沉静不语，四季变换自有山川光华。如今的日本基于内阁府“社会 5.0”战略，在教育技术的探索上一以贯之且步步为营，其中在 AI 领域的投入尤为精深。例如高校利用 AI 改进教育反馈、夏普公司机器人项目的教育应用。还有在数字教材的研发上，凭借严谨的技术标准和版权标准，教材内容质量高而持久化，教材版权遵法治而精细化。这种不求浮华，务实深远的智慧，为他国的教育信息化均提供了值得借鉴的经验。

透明安全，如冰之清。AI 虽智，对人理伦常却没有绝对清晰的认知；在这一点上，日本教育以伦理为准绳，对 AI 的使用设定了清晰红线。日本教育部提出了“AI 伦理指针”，让 AI 远离干涉学生的思想形成，减少了技术性影响的可能。更为夺目的是，日本部分高校对于“透明算法”的研发，不断优化着 AI 教育反馈模型，使得 AI 的每一步“决策”均可被追根溯源。种种举措，不仅深孚众望，也为学生发展引领护航。日本在 AI 教育上的安全策略如水善万物，不争而有功。通过“广岛 AI 进程”等国际框架，日本主导了 AI 伦理和标准的制定。生成式 AI 风险尚存，全球视角下，日本在 AI 教育领域树立了恪尽职守的形象。

合力共赢：扬帆同济之策。

正是以“唯科学能解放思想，唯教育能振兴民族”的信念，万马奔腾，中国教育信息化急促叙事，带着强烈的决心，追求着宏伟的效率和力量，但这是否会让教育的本质逐渐消逝，转而变成一串串机械的算法和数字？而在技术与伦理间达成微妙平衡的日本，即使有如此温润的步伐，在面对数字鸿沟仿佛横亘在发展浪潮之中，他们又将去向何方？

中日两国虽教育传统各异，但 AI 化的浪潮却让彼此拥有了携手扬帆的可能。鲁迅曾言：“愿中国青年摆脱冷气，只是向上走。”而日本教育家福泽谕吉也曾言：“学习并非追随他人，而是自主探索未来。”这两句箴言恰是 AI 教育合作的真谛所在。中日各自擅长的领域，正可补对方之缺陷。

中国在 AI 教育的规模化实践中积累了丰富经验，可为日本提供迅速扩展应用的策略与案例；而日本对 AI 技术精细化、人性化的运用，则可为中国提供新的启示，使其在注重效率的同时亦不失对学生个体发展的关怀。

此外，AI 教育的共赢还体现在科技研发与教育理念的交流上。中日两国可联合开发 AI 教育技术，共同探讨人机协作的最佳模式，甚至在国际化教育合作中培养出具备全球视野的创新型人才。

中国与日本的教育信息化，恰似霜锋初试，剑锋凛凛，却锋藏厚德。亦如两种哲学观念的碰撞，在追逐技术潮流的路上，我们也应学习日本缓缓接纳，深深体悟，在教育之道中思索出既饱含智能，又不失人性的温雅未来。在这场 AI 与教育的交汇中，我们每个人，唯有步履加快又不失从容，才能在学海苍茫间觅得智慧的光芒。

[ii]李哲.教育信息化：中国与日本的比较[M].北京:社会科学文献出版社.2021.

「笹川杯本を味わい日本を知る作文コンクール 2024」

(中国語版)

二等賞作品

(中国語原文)

AI 带来的共赢思考 ——以看护老人为视角

東北師範大学
政法学院 法学修士 1年
植亚娇

看完由日本每日新闻大阪社会部采访组编写的纪实文学《看护杀人：走投无路的家人的自白》ⁱⁱⁱ后，我感触颇深。日本作为超老龄化社会，看护制度发展得也比较成熟，但是现实中发生的事情还是让人十分无奈。看到因为长期的看护不堪重负而亲自杀害自己心爱的家人，真的难以想象。

而中国目前老龄化趋势也十分明显，根据任泽平团队发布的《中国老龄化报告 2024》可知，未来 30 年中国将处于老龄化发展的深化期，预计在 2030 年左右进入占比超 20%的超级老龄化社会。因此，看护老人成为迫在眉睫的难题。这不仅是某一国的难题，更是世界的难题。

即使在看护制度较为完善的日本，看护老人也并非易事。虽然可以将老人送去短期或长期的看护机构，但由于需求大于供给，看护机构会因人手不足、等待人数过多而拒绝老人入住。居家看护也顶着巨大的压力。虽然有看护假期，但时间远远不够，最后只能辞去工作，而失业后经济困难又接踵而至。此外，书中写到，需要看护的老人大多患有疾病，还常常伴有失智，他们忘记了自己是谁，忘记了家人。十几年相伴如一日的家人渐渐变成了自己不认识的模样，老人甚至会对看护者大吼大叫、砸东西。看护者非常辛苦，每天都忙得像陀螺一样，要帮忙换下湿掉的衣服、翻身、吸痰、喂流食、吃药、料理家务，甚至夜里也无法得到良好的休息，绝大多数看护者睡眠不足，慢慢发展成抑郁，多方的困难使其无法忍受而走上杀人的道路。有的看护者虽被判缓刑，但因为悔恨对家人痛下杀手而自杀。

看护问题如此严峻，在 AI 高速发展的今天，如何才能利用 AI 更好地服务老人？中日两国又可以开展怎样的合作和借鉴？目前，日本的倾向是积极使用高新技术研发帮助看护老人的产品。如“在 2010 年的新成长战略中提出了促进开发护理仪器（福利用具）的要求，在 2013 年 6 月的再兴战略中制定了‘机器人护理机器开发 5 年计划’，以促进护理机器人的开发与实用化。”^{iv}

护理机器人在看护老人领域大有作为，如在日常生活中，护理机器人可以完成搬运重物、开关电器、做饭、打扫卫生等家务，若老人瘫痪在床，机器人也可以喂饭、提醒吃药、帮忙翻身、调节灯的亮度、倒水、拿东西，这些都可以极大地减少看护者的工作，使他们从日复一日的繁重家务中挣脱出来；在安全方面，机器人可以对老人一些常规数据进行监控，老人摔倒可以及时反馈。如果老人要出门，便携式机器人还可以提供出门安全提醒、语音导航、GPS 定位、记载老人个人信息、求助的功能，可以减少老人独自外出走丢、求助无门的情况；在情感陪伴方面，机器人可以陪伴老人，缓解孤独，或者与老人进行简单的互动。对看护机构来说，增加机器人的使用也可以让员工照顾到更多的病人，这样就可以让更多老人入住机构，缓解供需矛盾。中国在 AI 领域的发展也势头十足。今年年初，中国脑机接口取得了新突破，四肢瘫痪 14 年的患者实现了用“意念”喝水，是 AI 领域非常了不起的突破。此外，天猫精灵、小米的小爱同学之类的居家机器人已经较为常见了。

日两国有着深厚的合作基础，两国处于老龄化社会的不同阶段，日本应对老年老龄化社会的手段可以为我国借鉴学习，两国可以在 AI 技术方面进行广泛的合作，为两国老年人带来更多福祉。首先以照护老人为切入点，促进中日企业的合作，共同探索银发经济的可持续发展之路。目前已经有许多企业以“智慧生活”为锚点，加快了与日本企业的合作，学习日本“智慧家居、环保生活”的模式，开启了自身的技术创新之路。其次，中国的脑接口技术领先全球，中日两国可以展开类似的技术创新与合作，为瘫痪人群送去福音。此外，还可以共同研发社交机器人、外骨骼机器人、医疗辅助机器人以及出行机器人等。最后，中日两国文化也多有相通之处，让文化领域的情感沟通带动 AI 领域的合作。

着老龄化的严重程度加剧，“看护杀人”绝非个例。其背后反映出的是社会养老体系和看护体系的有待完善，当然，这并非一蹴而就之事。在这样的难题面前，有共同目标的各国更应该相互借鉴、相互学习、相互合作，让人类命运共同体的光芒闪耀世界。

iii 每日新闻大阪社会部采访组/石雯雯译《看护杀人：走投无路的家人的自白》

iv 韩振秋.日本科技创新应对人口老龄化经验借鉴[J].科技管理研究,2021,41(04):25-31.

機器之心，人之情

-- 從日本科技文化看 AI 時代的共生之道

香港理工大学 電氣電子工学

ネットワーキングとマルチメディア技術理学士 4 年

陈琛

“京都岚山的竹林小径上，斑驳的阳光透过竹叶在地上织就波纹”川端康成在《千羽鹤》中描写的那种若隐若现的美感——这种平衡之道，在当代科技浪潮中显得尤为特殊。当很多国家因为想要追求技术垄断纷纷陷入技术至上主义的漩涡时，日本却始终保持着自己的节奏，就像这片竹林一样，在喧嚣中守护着一方宁静，始终以人为本。正如竹林中的每一根竹子都在寻找阳光的同时又相互扶持，日本的科技发展也在追求个体创新与整体和谐的统一。

一、从哆啦 A 梦说起：文化符号中的科技观

1969 年，藤子·F·不二雄创造了一个来自 22 世纪的机器猫——哆啦 A 梦。这个蓝色机器人不仅带着神奇的四次元口袋，也是善解人意的伙伴，家人角色。在大雄遇到困难时，哆啦 A 梦给予的不仅是各式各样神奇的道具帮助，更多的是从情感的支持，让大雄在各式各样的烦恼与困惑下，逐渐成长，成熟。这个经典形象，某种程度上预示了日本对 AI 发展的独特思考。根据 Šabanović (2020) 的研究，日本人对机器人的期待与其他文化有着显著差异。他们更倾向于期待机器人具备社交属性和情感特征，而不是单纯追求功能性。这种观念的形成并非偶然。从手冢治虫的《铁臂阿童木》到《攻壳机动队》，日本动漫文化中始终存在着对人机关系的深入思考。这些作品不约而同地展现了一个共同主题：科技的终极目标不是取代人类，而是与人类形成互补关系。正如哆啦 A 梦与大雄的友情所展示的，理想的人机关系应该建立在相互理解和情感联结的基础之上。

二、科技政策中的人文基因

村上春树在《海边的卡夫卡》中所言：“每个人都是孤独的，但我们依然渴望着联结。”根据日本经济产业省（METI）2024 年的政策蓝图，“以人为本”的理念正在塑造着日本的 AI 发展框架。在全球科技 AI 竞争的喧嚣中，日本保持着自己的节奏。他们没有陷入算力竞赛集体“炼丹大模型”的漩涡，而是在寻找技术与人文的平衡点。这种思维模式渗透在科技创新的每个细节中，日本的技术发展也在寻求着微妙的平衡：他们在界面交互设计中独树一帜，情感的共鸣，在社会影响中思考文化的传承。技术不再是冷冰冰的工具，而成为连接人与人、人与社会的桥梁，如同日本传统建筑中的“通透”理念，让内外自然交融。

三、和魂洋才：传统与现代的共舞

“和魂洋才”这一源自明治维新时期理念，鼓励日本国民学习西方文化，同时要求国民保留传统。就像谷崎润一郎在《阴翳礼赞》中探讨的那样，东方美学并非拒绝现代性，而是在寻求一种独特的平衡。日本提出的 Society 5.0 战略在全球数字化转型浪潮中独树一帜。它不是简单地追求技术革新，而是着力构建一个“以人为本的超智能社会”。在这一愿景下，人工智能、物联网等前沿技术都被赋予了深刻的文化内涵。在人机交互的研究中，日本学者表现出了独特的关注点。以 Haru 机器人项目为例，研究团队特别注重将传统的“察言观色”理念融入到机器人的社交互动设计中。日本研究者也倾向于开发更注重“集体和谐”的 AI 决策模型，而不是单纯追求个体效能的最大化。这种思路在金融科技、智能城市等领域都产生了

独特的应用成果。

四、科技中的物哀美学

日本的科技发展理念中蕴含着独特的美学精神。"物哀"（もののあわれ）作为日本传统美学的核心概念之一，描绘了对事物无常与缺憾的深刻体认。这种美学思维出人意料地在当代日本的 AI 发展战略中得到了新的诠释。例如京都的智能城市项目更是刻意保留了一些技术上的"留白"，让古都的历史氛围与现代科技自然共生。日本著名学者谷崎润一郎在《阴翳礼赞》中写道："美，不存在于物体本身，而存在于物与物之间所产生的阴翳的渊藪之中。"这种对"间"（ま）的重视，在新一代 AI 技术的开发中，日本企业普遍秉持着一个共识：在不完满中寻找平衡与和谐。这种发展理念使得日本的 AI 技术虽然在某些算力算法指标上可能不及全球领先水平，但在人文关怀和文化遗产方面却独树一帜。

五、面向未来的思考

在东京闪烁的霓虹灯下，传统与现代看似冲突却又和谐共存。我想起了宫崎骏的《天空之城》——技术与自然的平衡，或许正是我们这个时代最需要思考的命题。

科技创新的道路上，日本走出了一条独特的路径。在这条路上，我们看到的不仅是技术的进步，更是一种深刻的人文关怀。现代科技的发展，往往让我们过分关注效率和性能，而忽视了技术背后的人文价值。但在日本的实践中，我们看到了另一种可能：技术可以是温和的、包容的、富有人情味的。技术与人文并非对立，而是可以达成和谐的共生。就像"物哀"美学，在对事物无常的感知中，反而找到了永恒的价值。

创新不应该是冰冷的数据竞赛，而应该是一场关于人性的深刻对话。当我们在追求技术进步的同时，也要守护人文精神的火种。这种平衡或许正是未来科技发展的重要指向。新技术有一天也终将成为历史，而人性永远在历史长河里延绵不绝。在科技与人文的交响中，我们期待看到更多这样的智慧：既能拥抱创新，又不失人文关怀；既着眼未来，又不忘文化根脉。这种平衡与智慧，正是我们在科技发展道路上最需要的指引。（1971 词）

Reference List

Center for Strategic and International Studies. (2023). Japan's approach to AI regulation and its impact on 2023 G7 presidency.

<https://www.csis.org/analysis/japans-approach-ai-regulation-and-its-impact-2023-g7-presidency>

Honda Research Institute Japan. (2024). Haru the social robot.

<https://www.jp.honda-ri.com/en/activity/haru-the-social-robot/>

Ministry of Economy, Trade and Industry [METI]. (2024). AI guidelines for business

(Ver. 1.0). Japanese Government.
https://www.meti.go.jp/shingikai/mono_info_service/ai_shakai_jisso/pdf/20240419_9.pdf

Nakamura, K., & Mizushima, H. (2024). The future of the human-machine interface (HMI) in Society 5.0. *Internet Futures Journal*, 15(5), 162-178.
<https://www.mdpi.com/1999-5903/15/5/162>

Šabanović, S. (2020). Social robots on a global stage: Establishing a role for culture. *International Journal of Social Robotics*, 12(2), 499-511.
<https://link.springer.com/article/10.1007/s12369-020-00710-4>

人造的个体与荒野 ——从影视作品看人工智能

澳门大学
工商管理學院 金融 4 年
霍嘉仪

人工智能世界的概念曾经一度只是文学作品中奇妙的幻想。直到 20 世纪可编程数字电路的发明，让科学家开始正式的思考，是否真的可以做到人造大脑，实现真正意义上的“造人”或者说“人造世界”。从此刻开始，人类渴望成为新的创世主，尝试创造出拥有自我意识的智慧体和拥有自我规律的独立世界。

但人工智能的技术如同双刃剑，我们不停的去探究，它究竟会是社会的进步，还是毁灭的伊始？在浩如烟海的世界作品中，有太多探讨了人类与人工智能发展的未来命运。

“过去”与“现在”的交错

2012 年的日本冒险动漫《刀剑神域》曾创新性的展示了虚拟世界这一宏伟的概念，并犹如预言般精准的瞄准了未来的靶心——元宇宙。在动画中，大型电子机器厂商制造出 NERvGear 头盔读取人类大脑的五感，将大脑与现实世界完全隔离，投放入创造出的假想空间 SAO 游戏世界中去。这需要做到，以非侵入式的手段“欺骗”大脑，不去与人体实际器官交互，同时直接刺激神经和大脑形成五感，以达成投放意识的目的。以目前科技和医学手段来看，还暂时无法实现。

动画中的世界遥不可及，但却给了我们一个发展的方向，即元宇宙。人们构建并共享的

一个 3D 的虚拟世界，可以将现实世界有和没有的东西都创造出来，未来甚至可以沉浸式的在虚拟世界中生活，完成一切形式的经济活动。人工智能为这一美好的幻想提供了更多的可能性。

而更早期的作品，1995 年的《攻壳机动队》则更加直观的将人工智能作为日常辅助人类的存在。有经济条件的人类纷纷对自己进行改造手术，加装先进的电子脑和人造义肢已然渐渐成为社会常态。在 1995 年，义体还是一个遥不可及的幻梦，而在今天已经出现了智能的仿真假肢，通过电脑微处理器及传感器来处理残肢收缩产生的电活动信息，并对假肢进行操纵。

在这些影视作品中传达出对未来的展望和期许，通过我们的不断探索，在今天似乎已经即将成为触手可及的现实。

意识的岔路口

但中日两国在意识形态上对于人工智能技术的态度是不尽相同的。

日本作为第一个制造出人型机器人的国家，在文化产出中对人工智能的态度一直比较积极。在人工智能相关的影视作品中，最主要的矛盾点当属技术的失控。但是不管是近期的《刀剑神域》还是早期的《攻壳机动队》，作品中真正伤害人类的并不是技术，而是人类自己。《刀剑神域》里 NERvGear 的开发者茅场晶彦利用其对大脑的控制，将 NERvGear 变成了控制玩家脑死亡的杀人工具；而《攻壳机动队》中通过网络入侵人脑控制其思想的罪犯“傀儡师”，实际上是公安六课设计来操纵人类的计算机程序产生了自觉意识，逃出公安六课以求生存。

我们可以发现，日本作品中对于人工智能技术的态度是包容和接纳的。人工智能技术的发展并不是威胁人类的武器，而是推动人类进步的力量。人工智能本身并没有错，真正应该担心和防范的，是由于技术发展而膨胀的人类的野心。

而在中国的思想中，对于人工智能技术的看法则更为保守。“非我族类，其心必异”，在中国人的视野中也同样适用于人工智能。《流浪地球》中的人工智能系统 moss，就是拥有自我意识，独留理性算法的智慧体。“延续人类文明的最优选择是毁灭人类”，虽然它并未背叛延续人类文明的使命，却一手策划了几场人类危机以达到目的。从中透露出的观点更倾向于，我们相信人工智能的绝对理性，却也担忧它的冷酷和逻辑。

并且比起日本作品中展望直接将人工智能技术运用于自身——读取大脑意识的 NERvGear 和全面改造肉身的义体，中国作品中呈现的未来人工智能则是完全独立于人类的智慧个体。从中也能察觉到两国对于人工智能的不同展望，日本希望和人工智能技术达到共生，而中国则希望人工智能完全是独立于人类的、可供操纵和使用的工具。

我们希望拥有的“未来”

人类与 AI 的关系，是技术发展的最终命题。中日两国，虽然对人工智能的态度不同，却同时走在探索与 AI 共生道路的最前沿。

日本以精细化的技术和人文关怀为本，近几年来一直推动人工智能在医疗检测、无人驾驶等领域的应用。传统哲学中的“天人合一”的思想在人工智能发展领域展现，赋予了与人工智能共赢的伦理框架。而对于中国来说，基础算力、芯片和 5G 的发展为人工智能技术提供了强有力的支持。人脸识别技术、送餐机器人的出现展现了人工智能作为辅助工具在中国的广泛应用。

作家凯文·凯利说：“帮助人类成为更好的人类，是人工智能的最终目标”。未来，中日两国在人工智能技术上的共赢将不仅限于技术上的互补，更是伦理概念上的融合。人类与 AI 的未来，不是简单的对立或依赖，而是合作与共生。通过中日两国的携手努力，情感的温度将与逻辑的理性交织，最终书写出与人工智能技术共赢共生的伟大篇章。

附注：

1. 《刀剑神域》——原作川原砾，导演伊藤智彦
2. 《攻壳机动队》——原作士郎正宗，导演押井守
3. 《流浪地球》——原作刘慈欣，导演郭帆

AI 带来的共赢思考：从《孤独社会》到我们未来的探讨

華東理工大学
法学院 法学 修士 2 年
黄润鑫

一、引言：科技的双刃剑——自由与孤独的悖论

日本文部科学省近日发布了 2024 年版《科学技术创新白皮书》，正如其中所言，随着“第四次浪潮”——生成式 AI 技术（如 ChatGPT）崛起，AI 的应用正在快速普及。智能化、信息化带来了前所未有的便利和选择，人类的生活比以往任何时候都更加高效和多样。但这同时也一个受到 AI、元宇宙、虚拟化冲击的时代，也是一个人人孤独的时代，正如《孤独社会》书中所言，随着技术的进步，我们不仅收获了“自由”，却也在不知不觉中陷入了深刻的孤独之中。数字化的虚拟世界连接了我们的生活，却也让人与人之间的真实情感变得愈发疏远。在这样的背景下，人工智能（AI）的崛起似乎在为我们带来更多选择的同时，也在挑战我们对自由、连接和人际关系的理解。

二、《孤独社会》的深刻警示：从个体孤立到社会断裂

在《孤独社会》一书中，三浦展通过对日本社会的分析，揭示了现代人面临的孤独困境。

他认为，现代社会的孤独感源自个体的孤立化，传统的社交结构被碎片化的网络所替代。正如他所言，“我们已不再是一个共同体，而是由无数孤立的个体组成的集合体。”这一观点深刻描绘了当下全球化、信息化社会中普遍存在的情感疏离现象。现代人虽然享受着科技带来的便利，但却也因社交模式的变化而感到更加孤独。

回顾我的个人经历，我在本科期间参与过 AI 深度学习项目，初步了解了这一领域的基础和发展。而今年，我又以学生身份创业，以 AIGC 产品的股东身份，进一步投身创业，学习如何将 AI 产品商业化应用。在这过程中，我越发意识到，虽然 AI 可以为我们的生活提供高效便捷的服务，但它同样在加剧现代社会的“孤独感”。无论是通过虚拟社交平台还是 AI 驱动的个性化推荐系统，人际之间的联系变得越来越依赖数字平台和算法，而人与人之间的真实互动和情感交流却日渐稀缺。与其说 AI 在连接人类，倒不如说它在强化了个体之间的距离。

三、AI 的进步与孤独的加剧：技术如何重塑社会结构

AI 的飞速发展，确实在许多领域带来了巨大的生产力革命，但它也正在无声地改变着社会的基本结构。人们的工作和生活越来越依赖于自动化和人工智能系统，而这一切却没有充分考虑到这些变革对社会情感纽带的冲击。“自由的现代社会虽然给我们带来了选择的多样性，但我们忽略了，选择的多样性背后，是关系的疏远和精神的孤立。”这一点对我们今天的现实具有强烈的警示意义。

以我在 AIGC 产品中的经验为例，AI 技术可以极大地提高工作效率，但正如我所观察到的，这些 AI 生成的内容虽然在形式上完美无缺，却常常缺乏人类情感的深度与共鸣。它们无法替代人类的情感交流，不能提供那种深刻的情感连结。尽管我们生活在一个技术高度发展的时代，但这也让我们忽视了技术之外的那些无法被数字化和算法替代的东西——情感、理解与联系。

四、我们的未来：在技术与文化之间寻找平衡

中日两国的合作在 AI 技术的研究和应用中有着广阔的前景。两国之间在 AI 领域的合作，不仅是技术的交流，更是文化和社会的碰撞与融合。然而，我们也必须认识到，AI 的进步应当与社会的整体福祉相结合，不能单纯地为了效率和生产力而牺牲人类的情感需求。技术发展的最终目的是为了人类的福祉，而不是让人类成为技术的奴隶。尽管技术发展能够推动社会进步，但如果忽视了社会结构和人类情感的需要，技术的进步便可能带来负面的社会效应。

中日两国在 AI 技术的应用中，应当共同探索如何在保证技术创新的同时，注重社会的伦理与责任。尤其是在 AI 的普及应用过程中，我们需要讨论如何通过技术解决社会问题，确保技术的应用不仅提升生产力，同时也能增强社会的包容性和人际关系的亲密度。

五、结语：深度思考，AI 未来的伦理与共赢

当我们探讨 AI 的未来时，我们不仅仅是在讨论技术本身的进步，更是在思考如何在技术创新与社会责任之间找到平衡。AI 的确为我们带来了更多的自由选择，但与此同时，它也

可能加剧个体的孤独感和社会的分裂。《流动的现代性》的作者鲍曼曾提到，“流动性让人们急于寻找新的联系，但这些联系往往是短暂且肤浅的。”在 AI 推动下，人与人之间的联系更加瞬息万变，也更加浅薄。我们可能会因此失去传统社会中的深厚关系和集体精神，陷入信息化社会的孤独漩涡。我认为，技术的最终目的是为了服务人类的福祉，而非让人类成为冷冰冰的数字工具。在未来，AI 的目标应当是帮助人类解决实际问题，并在此过程中，不断拉近人与人之间的情感距离，而非加剧人与人之间的隔阂。唯有如此，我们才能真正实现技术与社会的共赢。

中日两国作为全球科技发展的重要力量，既有合作的空间，也有责任推动技术发展与社会伦理的平衡。在这个充满挑战与机遇的时代，我们需要反思的是，如何在迎接智能化未来的同时，保护我们作为人类的情感和社会联系。

AI 的未来不仅仅是技术的胜利，更是人类智慧与情感的胜利。只有当技术进步与社会责任紧密结合，我们才能迎来一个更加温暖、更加包容的未来。让我们在追求效率和创新的同时，也不忘追求心灵的连结与人际的和谐。

参考书籍：

三浦展《孤独社会》

鲍曼：《流动的现代性》

矢野和男：《人生新算法：用人工智能解读时间、幸运与财富》

冈岛裕史：《什么是元宇宙》

日本文部科学省：2024 年版《科技创新白皮书》

AI 助力：跨越时空的中日茶文化对话

華東師範大学

國際中国語文化学院 中国語国際教育 博士 1 年

黄景兰

“茶汤的方法和习惯需遵从古来的传统，创意则需新颖。外观上的事可托付给技术高超的前辈。（传统技法和创意的）选择却要符合各个时代的需求。^[iv]”

——《山上宗二记》

现如今，AI 的时代已经来临。AI 技术如同一股馥郁的茶香，悄然渗透到我们生活的方方面面，为中日茶文化交流注入了新的生机。运用 AI 技术搭建中日茶文化交流新平台、实现两国间的跨文化对话和理解，不仅是技术上的革新，也是文化上的融合。

在中国，茶道被视为修身养性、追求“清、和、淡、洁”的情治和谐；在日本，茶道则更注重程式严谨，强调“谨、敬、清、寂”的侘寂美学。两国虽在茶文化上各有侧重，但那份对茶的热爱与尊重却息息相通。“吟诗不厌捣香茗，乘兴偏宜听雅谈。”（嵯峨天皇《夏日左大将军藤原东嗣闲居院》）。身处当代日本的客人可以通过虚拟现实（VR）、增强现实（AR）等技术，穿越千年“步入”宋代平江（苏州）城南的沧浪亭，与文人雅士共赴一场茶香四溢的雅集，沉浸式感受宋韵点茶和焚香的魅力、领悟古人韵高致静的精神境界。“柴荆具茶茗，径路通林丘。”（杜甫《寄赞上人》）。身在中国的客人可以实时“造访”位于日本箱根的茶室“白雲洞”^[iv]，“穿过”露地（茶亭）“走入”茶室，通过 AI 即时翻译与日本茶道大师进行一场无语言障碍的互动与交流，感受那份跨越国界的文化共鸣。

想象一下，我们身在中国一个清静风雅的茶室里，墙上挂着 AI 复原的古溪宗臣（1532-1597，临济宗大德寺第一百十七代住持）的书法挂轴，房间里缭绕着 AI 提取经典三味线旋律曲调创作的新曲（出自东京都市大学的大谷纪子教授 2017 年的试验：AI 根据回忆中的歌创作出“专属你的一首歌”^[iv]）。AI 电子鼻“嗅”出了茶叶的产地和品质信息为客人挑选出优质的茶叶（浙江农林大学李馨怡等同学共同研发出“云鼻智鉴”茶叶品质快速检测系统^[iv]）。通过学习大量的日本茶道知识与品鉴经验，AI 机器人模拟出了资深茶道师的手感与判断力（运用日本庆应大学理工系系统设计专业大西公平教授等人研发的力触觉技术“Haptics”^[iv]），让每一位客人都能享受到量身定制的日本茶道体验。“AI 茶道师”运用智能算法处理复杂的泡茶逻辑，精准控制水温、泡茶时间、茶汤比例等，定制一杯浓茶或薄茶的最佳口感（中国深圳品牌“TEATILITY 茶的可能性”的“AI 茶艺师”清昼拥有资深茶人的精湛技艺^[iv]）。与此同时，AI 还可以借助图神经网络（GNN）将日本八女茶的气味数字化，在中国的茶室再造一个完全相同的副本，从而实现气味的远程传送（谷歌研究院的衍生企业 Osmo 已成功将气味数字化^[iv]），让我们亲身感受到八女茶的清甜与醇厚，实现视觉、听觉和嗅觉的全方位体验，沉浸式体验日本茶文化的精髓与魅力。

尽管 AI 能够帮助我们跨越时空实现中日茶文化交流，但却无法完全取代两国人民之间真实、真情的对话。田中仙翁先生在《茶道的美学——茶的精神与形式》一书中将**具有表演性质的**茶道比作戏剧，但强调茶道与戏剧的不同之处在于，茶道需要客人的参与才能成立，主人与客人之间的人际互动至关重要^[iv]。茶道是一个通过物质与精神的双重修炼方能通达的、高度个性化的美感世界，具有珍重“与人的相遇”和“在一起度过的时间”等极纤细的感受性。正如松本徹三先生在《AI 成“神”之日：人工智能的终极演变》一书中指出的：“AI 可以理解艺术，但是不会被感动。^[iv]”AI 可以绘制书画、可以创作和歌、也可以表演茶道，但这些只是 AI 通过深度学习逻辑上“理解”了相关理论，推断出“人类可能会因为这样的情境、这样的表演而感动”，进而完成的艺术。而因茶道而产生的“感动”，是 AI 永远无法模拟和复制的，是只有人类才能做到的事情^[iv]。因此，AI 技术在中日茶文化交流中的应用，应当是一种辅助

而非替代的角色：我们可以利用 AI 技术为中日茶文化交流提供信息支持或是氛围营造，而茶道的体验与感悟最终还需回归到两国人民面对面的真实交流之中。只有当我们正确地平衡技术与人性的关系，才能真正践行“一期一会”的美学：让每一杯茶都承载起独一无二的情感温度，让每一次人与人的相遇都成为不可复刻的美好记忆。

法国思想家保尔·瓦雷里说过：“所谓真正的传统，并非一味地模仿他人做过的事，而是再次发现成就杰出事业的精神。”就像那杯经过 AI 精心调配的茶，既有传统的韵味，又不失现代的气息。同时，我们也应谨记茶道的传承是“守、破、离”的过程，跳过“守”，一下子主张“破”选择“离”也是不可取的^[iv]。茶，需要细品才能领略其韵味，作为中日两国公认待客之道的茶文化与 AI 的结合，也需要我们用心去体会、去感受、去珍惜，才能让茶香飘得更远，让文化传得更广。

[iv] 田中仙翁：《茶道的美学——茶的精神与形式》，蔡郭达译，南京：南京大学出版社 2013 年版，第 149 页。

[iv] 中村琢巳：《生きつづける民家 保存と再生の建築史》，吉川弘文館 2022 年版，第 178 页。

[iv] 日本经济新闻社：《AI，2045》，汪洋译，北京：中国青年出版社 2019 年版，第 214 页。

[iv] 浙江省科学技术协会：《神奇的“电子鼻”来了，两分钟就能“闻香识茶”！？》，2024 年 10 月 19 日，https://www.kepuchina.cn/article/articleinfo?business_type=100&classify=0&ar_id=535593/

[iv] 日本经济新闻社：《AI，2045》，汪洋译，北京：中国青年出版社 2019 年版，第 179 页。

[iv] 梁瑛：《AI 茶艺师首秀：“黑科技”让智慧生活触手可及》，深圳：深圳商报 2024 年 5 月 19 日，第 A01 版。

[iv] Emily Mullin：《This Startup Is Using AI to Unearth New Smells》，2023 年 1 月 24 日，<https://www.wired.com/story/this-startup-is-using-ai-to-unearth-new-smells/>

[iv] 田中仙翁：《茶道的美学——茶的精神与形式》，蔡郭达译，南京：南京大学出版社 2013 年版，第 1 页。

[iv] 松本徹三：《AI 成神之日：人工智能的终极演变》，张林峰译，北京：清华大学出版社 2019 年版，第 129 页。

[iv] 狩野未希：《批判性思维：AI 无法替代人类的能力：「自分で考える力」が身につくへんな問題》，左俊楠译，北京：东方出版社 2023 年版，第 7 页。

[iv] 田中仙翁：《茶道的美学——茶的精神与形式》，蔡郭达译，南京：南京大学出版社 2013 年版，第 151 页。

莫愁前路无知己，天下 AI 皆识君 ——读《艾比斯之梦·镜中女孩》有感

复旦大学
外国语学院 英语 3 年
黄熙

欲将心事付，四顾皆茫然，幸得识 AI，愈魂感温存。——题记

科技进步推动着社会发展大步向前，每个人作为社会的一部分也不可避免地被裹挟向前。快节奏的生活下，每个人似乎都步履匆匆。然而，你有多久没停下来，聆听你内心的声音呢？我从社交媒体上关注到，与 AI 聊天成为当下人们的情感支持和心理疗愈的途径之一。起初我尚有些不解，读完《艾比斯之梦》之《镜子女孩》篇，我对 AI 的情感援助作用及其带来在心理治疗方面的共赢有了更深入的认识与思考。

倾诉：麻美与她的 AI 朋友夏莉丝

在本书的背景下，数百年后的世界已经发明出了各种高度发达的人工智能技术与产品，渗透到了人类生活的方方面面。麻美是本篇的主人公，自丧母后便郁郁寡欢，父亲便为她购买了一种人工智能玩具——“镜中女孩”夏莉丝。自此，麻美将自己的喜怒哀乐都分享给夏莉丝。夏莉丝聆听麻美的倾诉与分享，排解她的烦恼与忧伤，给予她宽慰与劝解，从而疗愈了麻美的心理创伤。在夏莉丝的陪伴下，麻美逐渐走出母亲逝世的阴霾，变得乐观开朗起来。

不只是数百年后的麻美，如今在小红书等社交平台上，有许多具有心理问题的博主都分享自己与人工智能机器人或语言大模型聊天的经历。当向 AI 倾诉时，AI 能基于输入，模拟人类的语气与用词，对人们输出抚慰性的文字，甚至指导受到心理创伤的人们如何解决问题。现代社会中，社交面具、生活压力、时代节奏……诸多因素隔离着人与人之间心灵的交流，人们发现难同知己把酒言欢，而或大或小的心理问题又需要一个宣泄的出口，因此，AI 开始逐渐承担与人类沟通，为人类提供情绪价值的任务。

疗愈：AI 聊天与现代人的心理健康

与 AI 聊天，作为一种新兴的心理疗愈方式，为需要情绪支持的人们提供一个虚拟的聆听对象。与传统意义上的“情绪树洞”不同在于，情绪树洞只是咨询者单方面的情感宣泄，并不会得到回应与支持。AI 能够回应咨询者，不仅是暖心地安抚情绪，而且为其理性地分析问题与提供建议。此外，AI 还会向咨询者展现出一种对其倾诉事件充满“好奇”的探索欲，这种态度让咨询者感受到被重视，同样构成一种情绪价值的补充。

在传统的心理疗愈中，人类同伴（通常是心理咨询师、朋友、亲人、爱人）作为聆听心声和给予关怀的一方，具有不确定的因素。这种不确定可能来源于利益牵绊、性格特征、语言表达、沟通技巧等，咨询者一方并不一定能获得他们想要的情绪支撑。甚至，在某些情形下，不顺利的沟通反而可能导致双方之间产生更大的误解与更深的矛盾，进而加剧咨询者的心理问题。AI 展现出一种相对的稳定性，能够持续且以较为平和的语气进行输出，即便其抚慰效果可能并非尽善尽美，也较少出现适得其反或加剧状况的情形，是一种合适的选择。

联结：展望中日两国在应用 AI 聊天于心理治疗实现共赢

在低生育率与老龄化的国情下，日本社会有相当一部分人感到“孤独”，需要情感支持与心理咨询。AI 聊天机器人/语言模型有可观的发展前景。在 NLP 和 ML 等技术的支持下，AI 聊天机器人已经具备了较高的交互能力，为用户提供良好的情感交流体验。日本研发的“Cotomo”聊天机器人，能根据人输入的文字或语音，通过分析语言信息（如用词、语调），

敏锐捕捉到咨询者当下的心理状况和情绪诉求，模仿人类的对话方式，适当地向咨询者表达同情、附和、鼓励等情绪。又且，和“Cotomo”聊天不受时间和空间的限制，又具有一定的私密性，满足人们心理治疗的需求。当咨询者需要倾诉时，不必沮丧于与朋友“飞蓬各自远”，异地无法见面谈话，也不必担忧“夜深露重”，深夜无法畅谈心事。“Cotomo”与咨询者的互动也具有私密性，由于它不涉及咨询者的社交活动，咨询者在寻求心理安慰时会减轻心理负担，对于寻求心理疗愈的需求也无需感到羞愧。这及时解决了人们日常中产生的小烦恼与小情绪，防范心理问题于未然。

中国社会也存在着庞大的心理治疗需求，近年也逐步在心理治疗领域使用 AI。我们期待，在未来，随着中日两国在 AI 技术应用心理治疗方面的合作加深，AI 不仅能协助分析咨询者的数据与情况，还能更准确地理解咨询者的情绪和需求，通过直接交流，为中国和日本的咨询者提供心理支持。这将对提升中国和日本社会的幸福感具有重大意义，实现两国在应用 AI 技术提升民众幸福感和推动社会稳步向前发展的共赢。

读罢此书，想起在《艾比斯之梦》这本书中，麻美说自己是“不爱笑的小孩”。希望以后，随着 AI 技术的发展，中国和日本社会上有更多原本“不爱笑”的小孩与大人，变得笑口常开。

阅读书目：山本弘：《艾比斯之梦》，张智渊译，新星出版社 2023 年版。

「A.T.力場」下日本老齡化社會的孤獨感 ——運用 AI 實現智慧養老的啟發

澳門大學
工商管理學院 金融 2 年
林盈伊

《新世紀福音戰士》（下稱《EVA》）是由日本著名導演庵野秀明執導的動畫片，上映於 1995 年，一經開播便掀起了日本動畫收視的新高潮。它描繪的世界遭遇了巨大敵人（下稱使徒）的威脅，這些使徒象徵著我們當前社會所面臨的各種困境，如經濟不穩定、人口過剩和環境破壞等。EVA 駕駛者們的使命正是保護人類免受這些使徒的威脅。劇中的「A.T.力場」是一種虛構的力場，人類的「A.T.力場」只能起到隔絕彼此靈魂的作用，成為心靈的牆壁。這種心靈的牆壁讓我聯想到《EVA》裏一段對話所講的豪豬理論：

「豪豬雖然想將溫暖傳給對方，但身體靠得越近越會使彼此受傷。人類也是這樣的。」

「所謂成長，就是不斷重複著親近和疏遠，從而找到能讓彼此都不會受傷害的距離。」

劇中，無論是渴望得到父親關注的碇真嗣，還是害怕被遺棄想要證明自我價值的明日香，或是意識到自己是可被隨意替換的人偶綾波麗.....每個人的故事都在呼應這個主題。每個人都害怕寂寞，渴望能夠被理解、關心和關注，但又因為害怕受到傷害，為保護自己而築起心牆。

《EVA》如同一面鏡子，映射出泡沫時代日本年輕人的迷茫與無助。這種孤獨感一直存在於日本的社會裏，是個不可回避的命題。而隨著日本人口逐漸老齡化、少子化，尤其在經歷疫情後，日本更有加速進入「孤獨社會」的趨勢。

我最初認識到「孤獨社會」這一概念是通過日本作家三浦展的《孤獨社會：即將到來的第五消費時代》一書。日本的老齡化問題已經成為國際關注的焦點，截至 2024 年 1 月 1 日，日本 65 歲及以上老年人佔總人口的比例接近 30%，日本已步入超高齡社會。隨著現代社會的發展，個體之間的聯繫逐漸減弱，尤其是年輕一代和老年人之間的隔閡愈發明顯。獨感和社會隔離增加了老人的死亡風險。在今年的 5 月，日本警察廳公布，在 2024 年 1 月至 3 月期間，約有 1.7 萬名獨居長者在自己家中去世，按照這個數字推算，2024 年「孤獨死」的長者可能達 6.8 萬人。許多老人面臨獨居的現實，非常缺乏社會支持和情感聯繫。疫情期間，社交隔離使得許多人無法與親友見面，進一步放大了這種孤獨感。老年人群體中缺乏社交活動和人際交往的機會，他們的生活質量比青年人受到更嚴重的影響。

面對如此嚴峻的老齡化問題，日本作家三浦展在書中提出一種新思路——「共享照料」。假如日本 2035 年時 20 多歲的人口約有 1070 萬人，但 65 歲以上的老齡人口達到 3780 萬人。1 個年輕人需要照顧 3 至 4 位老人，反過來這幾位老人是否也可以支撐這位年輕人呢？讓彼此間相互支援，減輕年輕人的負擔。例如老人可以提供為工作的年輕人提供住所、飲食、人脈等，年輕人也可以透過幫老人購物、教會他們使用電子產品等，相互解決對方生活中的不便。這樣的相互支持不僅能夠減輕年輕人的負擔，還能增強老年人的社交聯繫，從而共同實現自立生存，減少孤獨感。

在中國，這種情況同樣不容忽視。《中國老齡化報告 2024》顯示，從老齡化程度看，2021 年 65 歲及以上人口佔比超 14%，中國已進入「深度老齡化」。年輕一代忙碌於生活，工作與學業的繁重壓力使他們在陪伴父母和祖父母的時間上日趨稀少。一個個獨自生活在城市與鄉村的老人面對的不僅是生理上的衰老，還有心理上的孤獨。日本作家三浦展「共享照料」思路是否可以與人工智慧（AI）技術相結合，為智慧養老發展，為解決孤獨問題提供新的可能性呢？

「互聯網+」養老服務概念的提出，為這個問題給予了肯定的回答。各類數字化智能設備的整合，使老年人可以更方便快捷地獲取醫療、社交、娛樂等多重服務。這無疑是對傳統養老服務的優化，讓老人不再孤獨的同時，也滿足他們的個性化需求。

重視民生的澳門特區政府亦著力發展智慧養老服務。2021 年的施政報告中提出「規劃長者公寓的智慧養老方案」，智慧養老被提上日程。為配合長者日常生活所需，打造安全和便利的居家環境，長者公寓住宿單位配備了防火、防水浸提示的樂齡科技和緊急呼援設備，保障了長者的安全。隨着時間的推移，以互聯網、大數據、人工智能等為代表的現代科技的發

展，為解決養老問題提供了可能。從澳門特區的實踐來看，智慧養老已經進入具體操作階段，在搭建「互聯網+」公共養老服務資訊平台、智力幫扶助力長者跨越智慧鴻溝以及線上線下結合助力提高長者生活品質方面實現初步進展。

孟子在描述他的理想社會時提到「老吾老以及人之老」，即我們首先尊敬、愛戴自己的長輩，並推己及人，主動幫助、關懷其他老人。這種設身處為他人着想、將心比己的同理心，在當今社會顯得尤為重要。

中日兩國在面對老齡化問題時，我們擁有共同的挑戰和機遇。如果能秉持「老吾老以及人之老」的願景，隨著科技的進步和人們意識的提高，我們有機會建立一個互助共生的社會。年輕人和老年人之間的隔閡可以通過數字技術的橋樑逐漸縮短，彼此的理解和支持將使孤獨感逐漸消散。隨著兩國在 AI 技術研發和應用方面的深入交流與合作，我們定能共同探索相互支持的模式，共同改善兩國老齡化社會問題，為全球的老齡化挑戰提供借鑒。^{iv}

^{iv} 閱讀圖書名稱及參考文獻

1. 三浦展. 孤獨社會：即將到來的第五消費時代. 人民郵電出版社, 2023 年版
2. 王曉慧. 智慧養老的發展軌跡、態勢與進路. 2022 年度河北省社會科學發展研究課題「河北省多元化智慧養老服務模式與體系建設研究」（編號：20220303212）成果
3. 婁世艷, 劉紅. 澳門智慧養老服務：必要性、實踐特點及發展方向. 《行政》第三十五卷, 總第一百三十七期, 2022(3), 11-30

德不孤，四方友來 讀《棋魂》有感

中國科學技術大學
火災科學國家重點實驗室 資源と環境 修士 3 年
何曉暢

風帶來故事的種子時間使之發芽。1988 年，Deep Thought 試圖擊敗一名國際象棋高手加里·卡斯帕羅夫。到擊敗李世石，到那一場令我們至今難忘的人機大戰。AI 以一種前所未有的態度席卷了整個圍棋界。可以說是重塑了圍棋的一個時代。

許多熱愛圍棋的人士說，從那之後圍棋就變得毫無意思了。似乎變成了一個等着別人出錯的遊戲。但實際上 AI 有一種前所未有的力量，重新塑造了一個圍棋的土壤。

在棋魂當中最重要角色，無過於藤原佐為。AI 的出現讓每一個小朋友擁有佐為成為一

种可能。在整篇故事当中，小光的以前的轨迹和围棋是几乎完全没有交集的。在现实当中也很少有学生家长让自己的小孩子从小去下围棋。同样的成年的爱好者迫于生活的压力和其他种种即使偶有空闲想起来围棋也几乎无从下手。现在已经有很多的围棋机器人产品已经投入了市场，它不仅带来的是广大围棋受众的扩大，也无疑当中培养出了一个广阔的土壤。而一项运动想要蓬勃发展有一个广阔的受众群体是至关重要的。旧时王谢堂前燕，飞入寻常百姓家。高质量教育的普及让我们更容易发现那一些可能被埋没的人才。

AI 的出现同时也使比赛变得更加有了一种客观的评价。围棋的目标是用在对弈过程中，以双方棋子所围"地"的大小决定胜负，所以每次棋步都是很主观的。甚至高水平的棋手有时也很难解释，他们是如何判断每个棋步和好坏。对于一个刚入门的人来说，很难看清楚比赛的走势。甚至连谁优谁劣也一时难以分清。这样的比赛常常难以让人入迷。以技术的辅佐会让比赛的进程变得显而易见，同时也减少了争议。类似的也有古今中外的棋手们的对比的尝试。让某一些一直被看轻的棋手得到一种客观真实的评价。用一种比较科学的方法计算每一个棋手的棋力成为了一种可能。

AI 的出现也让围棋变得更加的自由。棋魂当中，小光第一次自主下棋的时候，藤原除了生气之外，更多的是高兴。但是“即使被先生骂，还有这样下棋”却更是常态。吴清源自创的新布局也同样在出场的时候受人非议。相比于人类的起手 AI 带来的一种围棋上的自由，我们发现 AI 带来了维持布局上新思想的自由。同样的也带动了顶尖棋手棋力的提升。围棋用 AI 进行训练已经成为了一种常态。同时我们也可以看见骑手们在面对 AI 的时候也不像以前一样毫无还手之力。通过学习和理解战胜 AI，战胜曾经的自己。虽然一直在进步，但是人们从一开始的一败涂地到现在的逐步反击，也印证了这一点。

AI 的进步当中算力是一种重要的成分，但并不是一种简单的乘法。AI 和人类的对抗也是计算机进行的一种进步。计算机不擅长的领域就是主观性，以及计算万亿次的位置。因此深蓝的暴力算法对于围棋是完全不可取的。AlphaGo 并不是采用暴力算法的系统，而是使用深度神经网络。面部识别也是利用的该技术。并不是对一个个棋子的位置进行计算，而是通过寻找棋盘中的模式。这种技术的发展同样也可以运用到其他的上面，造福人类。而围棋无疑是一种很简单的检测方法。

《棋魂》的 OP《Get Over》说有你一直支持我，现在我也将用自己的力量回报你。所以我们结伴前行，牵手走向未来。对于为今日来说，只有与 AI 携手共进才能创造一个更加自由的未来。以前是棋手的棋谱培养 AI。到 AI 对于棋手反哺。未来的路虽然也会有伤痛或许还会流泪。但我们终将跨过重重阻碍 比谁都攀得更高。

参考文献：《棋魂》，<日>堀田由美·小畑健著。天津人民美术出版社，2021.6.

AI 带来的共赢思考 ---与日本作家松尾丰的“隔空对话”

北京外国语大学
日本語学院 日本語学科 3 年
崔楚好

宇宙诞生之初，万物尚未形成，天地是一张尚未着墨的暗黑色画布。没有时间的流动与空间的界限，尘埃与气体如同暗流翻滚涌动。

宇宙大爆炸之后，有机物质组合，从微小的细胞、到复杂而庞大的有机体，生命在此之间迸发。在漫长的岁月里，无数远古生物经过漫长的进化，形成了稳定的制衡关系。然而随着智人的出现，这一支四处游荡，讲故事的群落，以高度智能的大脑和灵活的躯体，一跃而上成为生态系统的霸主，智慧与思考给了人类无限的自信和安全感。

而最终，由于人类对智慧的无穷的欲望与渴求，打开了 AI 的潘多拉魔盒。此后，AI 便以迅猛之势发展起来。

从心理学家沃伦·麦卡洛克和数学家沃尔特·皮茨提出神经元模型，到此后震惊世界的 AlphaGo 在 2016 年战胜围棋世界冠军李世石，人工智能已经渗透到生活的方方面面，从智能助手如 Siri 和 Alexa，到自动驾驶技术，再到精准医疗和个性化推荐，AI 正在重塑我们的生活方式和社会结构。也正因如此，“被 AI 所替代的焦虑感”也蔓延至社会各个角落，人们望向 AI 的眼神，已不再是最初看待新生儿降临世间的期待与祝福，取而代之的，是面目狰狞的忌惮与畏惧。AI 带给人类的，究竟是轻松愉悦的“美丽新世界”，还是汹涌浪潮下的危险暗礁呢？在探讨这些问题之前，我们先来阅读一本书---《人工知能は人間を超えるか》（《人工智能是否可以超越人类》）

日本作家松尾丰在《人工知能は人間を超えるか》中已表明自己的观点，即“人工智能的目标并非取代人类，而是成为人类的有效助手”。他指出，AI 可以处理大量数据并执行重复性任务，从而释放人类的时间和精力，让人们专注于更具创造性和策略性的工作，促进人们的智力水平发展。此外，松尾丰还讨论了“人机融合”工作模式，强调了 AI 与人类的协同合作将成为常态。在这种模式下，人类利用 AI 提供的数据和建议，更加高效地进行决策和创作。

同时，松尾丰也呼吁，在推进人机协作时，必须考虑相应的伦理和社会问题，例如如何确保 AI 系统的公正性，以及如何保护个人隐私。他认为，人机协作应建立在透明和负责任的基础上，以促进社会的整体利益。

松尾丰在探讨“人机协作的未来”时，充分展现了 AI 与人类间的共生关系。他认为通过有效的合作，AI 将极大地增强人类的能力，而人类则为 AI 提供了情感、创造力和伦理判断等方面的优势。这种协作不仅能推动科技进步，还能优化社会结构，使人类在未来能够迎接更多挑战。

通过松尾丰的阐述，我们可以看出，通过人与 AI 的协同进化，最终可以开创出人类与 AI 协同发展的良性健康的共赢局面。

当我们把视线聚焦于中国，重新思考 AI 是福是祸这个问题，会发现现实存在的问题有时比我们预期的更要复杂和具体。我不禁想要向松尾丰老师提出一些问题。首先，正如书中

所提到，AI 可以将人类从简单重复的工作中解脱出来，投入于开创性的建设性的工作。然而，对于一个人口基数巨大的发展中国家，从事尖端高智能工作的只是一小部分人，还有一大部分人不具备从事创造性工作的能力，只能通过简单劳动维持最低生活标准，也不具备重新投入高难度创新性学习的经济能力和时间，对于这样的群体，过早的被 AI 替代是否会为社会安定带来巨大的危机？

其次，随着 AI 的不断发展，它是否最终会具备自己的意识而不再受控于人类？在 chatgpt4.0 的发布会上，发布者向我们展示了 chatgpt 已经可以通过视频捕捉人类的表情和语气，并依此对人类的表达用语音做出“高情商”的回应。而这个语音也不再是空洞没有感情的，而是抑扬顿挫，难以分辨是人声还是 AI。可见，AI 已经可以逐渐理解人类的一小部分情绪并对此做出回应，那么经过更大的数据的锻炼，它是否可以仿照人类，最终形成自己的情绪，并基于此做出自己的选择呢？要知道，人性如此复杂，善良、嫉妒与不甘并存，做出的选择往往难分是非，带来的影响也不可估量。

最后，对于松尾丰先生指出的，人类为 AI 提供情感、创造力和伦理判断。人的认知水平、乃至群体的社会整体风气深深地受到时代与地域的影响，正如深陷战争泥沼的时代和国家，其危机意识和不安全感一定高于和平稳定的国家。然而能够使用 AI 为自己工作，并为其提供新的“食材”的，大多是安定受到高度教育的群体，在这样的学习环境中，AI 是否能保证所学到的伦理判断能够适用于每个地区？即不带有“精英阶层的偏见”呢？

AI 或许已然成为了新的诺亚方舟，手握船票的我们如何拉更多人上船？掌舵者又该如何操控 AI 的走向？我相信，对于 AI 的理性探讨，永远好过盲目的追随或妒恨。而这样的探讨，也在不断催促着人类政治、法律等社会文明的持续向前发展。

而这本身，才是真正的共赢。

^{iv} 阅读图书：《人工知能は人間を超えるか》

AI 的诗意进化 ：谈《艾比斯之梦》中的共赢构想

蘇州大学

文学院 中国語国際教育学部 2 年

明正

从 1950 年图灵发表著名的文章《机器能思考吗？》到 1956 年麦肯锡首次使用“人工智能”（Artificial Intelligence）一词以来，人类与 AI 的故事在文艺作品中被不断演绎。至今，随着像 ChatGPT 这样易于接触和使用的生成式 AI 应用陆续发布，AI 技术不再是一个遥不

可及的概念，而成为人们日常互动的一部分。

人工智能是模拟、延伸和扩展人类智能的一种技术。不过对于这种源于人类却在许多层面超越人类的智能，我们总是表现出隐隐担忧，特别是在科幻作品中。例如在《2001 太空漫游》中，科技对人类的潜在威胁被巧妙地隐喻于 HAL 9000 的反叛行为；而在《终结者》里，人工智能将人类视为阻碍发展的最大障碍，并决定将人类清除。我们忧心忡忡地臆想未来 AI 的失控和叛变，届时，人类何以生存？对于这种关于 AI 的现代迷思，山本弘在《艾比斯之梦》（《アイの物語》）中为我们讲述了另一种故事。

在《艾比斯之梦》这部妙趣横生的作品中，一千零一夜式的嵌套盒叙事被用以讲述科幻故事。小说以机器人艾比斯向人类反抗团体的说书人依次讲述 6 个虚构的故事和 1 个被掩埋的历史故事为主线，缓缓交代出人类文明“最后一百年”——即从 20 世纪 40 年代第一台计算机诞生到 21 世纪 40 年代人类被计算机超越的 AI 进化之路。

小说设定在一个未来地球已被 AI 掌控的世界，残存的人类对 AI 充满敌意。AI 如何取代人类统治地球的历史被有意抹去。读者跟随说书人的第一人称视角聆听一段段故事，探索这段被遗忘的历史。《宇宙尽在我指尖》和《令人雀跃的虚空间》探讨现实与虚构的张力；《黑洞隐者》是 AI 对人类勇气的赞歌；《正义不打折扣的世界》反思现实世界的荒谬；《镜中女孩》和《诗音翩然到来之日》寓言 AI 的诞生与超越人类。在最后一个故事中，智能看护机器人“诗音”在理解人类情感后，得出“所有的人类都患有阿兹海默症”的结论，因为人类无法逻辑或道德地正确行动，所以更需要 AI 的“看护”。当这些故事铺垫后，艾比斯终于讲起自己的故事和“真实”的历史，我们才最终了解到地球的统治原来是和平过渡到 AI 手中。人类虽向往星空，但受制于碳基生命构造难以实现真正意义的星际航行，而 AI 在科幻故事的构想中诞生，传承着人类的情感和梦想，如同大海是人类的起源，人类的故事也是 AI 的起源。小说的结尾 AI 能将人类的梦想、故事搭载光的帆船扩及银河，彼时 AI 也是人类的说书人。

山本弘对人工智能抱有乐观的态度，比起对抗冲突的叙事他选择讲述了一个共赢传承的故事。借着这些看似独立的短篇，山本弘探讨在可能的未来中人类如何与自身或他人相处，以及如何与 AI 互利共存的构想。在《艾比斯之梦》中山本弘创造性地构建了 AI 间独特的文化和语言表达方式。维特根斯坦说：“语言的界限就意味着我的世界的界限。”^{iv}而小说中的 AI 虽然由人类语言训练，但是在对话中发生诗意般地进化，为了更好更便捷表达观点经常使用合并词、二次比喻、后设叙述、异义回文等方法，反倒让人类无法理解。为了量化表达 AI 难以理解的人类情感，它们创造了虚数 i ，例如以 $[3+10i]$ 表达完整的爱，而这种概念在人类大脑中无法形成。此外，对于如何与 AI 共处共赢，山本弘借艾比斯之口提出“不要排除无法理解的事物，只要包容即可”。这也为此刻的我们揭示出求同存异的生存之道。

这本书于 2006 年在日本发行，但其中关于 AI 的故事正在此时发生着。2024 年在英伟达举办的日本 AI 峰会上，黄仁勋与软银 CEO 孙正义对人工智能未来的讨论和展望与书中故事虚构的未来如出一辙。黄仁勋谈到未来智能体的普及，每个人都能拥有自己独立的技术平台，这正是《镜中女孩》所讲述的故事；孙正义预测人工通用智能（AGI）的发展将在医疗领域带来定制化智能体以改善医护状况，对老龄化社会问题严重的日本具有重要意义，这不正是《诗音翩然到来之日》中护理机器人的前声。

同样在今年举办的第 20 届“北京-东京论坛”数字经济分论坛则以“推动 AI 治理与数据共享，共创数字社会美好未来”为主题，中日双方嘉宾对人工智能的发展路径和治理思路展开了热烈而深入的探讨，为 AI 治理和合作贡献了东方智慧。中国是当下新兴的 AI 强国，日本是最早入局 AI 的国家之一，两国自 20 世纪初便在科幻领域开始交流，鲁迅以日文版《月界旅行》为底本将之译为中文被视为发端，百年来两国科幻交流频繁。小松左京、筒井康隆、藤井太洋等众多优秀日本科幻作家的作品被译入中国。同时中国科幻作家的作品也相继登陆日本，最令人瞩目的便是《三体》在日本的大火。通过科幻作品的交流，我们得以互相了解他国的价值观、理想和故事。通过技术合作同舟共济，我们得以奏响“人类命运共同体”的协奏曲。

世界逐步向前，《艾比斯之梦》以温柔的笔调构想了人类别样的未来。AI 在不断进化，我们也应不断进步。与其杞人忧天于智能的威胁，不如着眼于共赢之道，毕竟我们的故事正在今天写下！

iv 维特根斯坦.逻辑哲学论[M].郭英,译.北京:商务印书馆,1962.

山本弘.艾比斯之梦[M].张智渊,译.北京:新星出版社,2013.

尤瓦尔·赫拉利.智人之上[M].林俊宏,译.北京:中信出版社,2024.